

富山県上市町

湯神子A遺跡

発掘調査概報

1992年3月

上市町教育委員会

序

埋蔵文化財は、わが国の古代の歴史や文化を理解するために欠く事の出来ない、重要で、貴重な資料であります。

上市町では、町の東部、湯神子地内において行なわれた、土地改良総合整備事業に先立ち、湯神子A遺跡の発掘調査を実施しました。

遺跡は約6000m²の範囲でしたが、地元、湯神子地区民の方々のご理解と、上市東部土地改良区のご協力により、主要農道で掘削工事を受ける1000m²のみ記録保存とし、遺跡の大部分は、ほ場整備された水田の下に保存することができました。

検出された遺構や遺物は、縄文時代、弥生時代から古墳時代、奈良・平安時代といった各時代のものが発見され、この地域での歴史のつながりを考えさせてくれました。また縄文土器や石器、土師器、須恵器などはこの地に生きた人々の姿を生き生きと示してくれました。

調査は、平成3年5月から7月と一部10月に実施しましたが、この間に掘り出された資料が上市町及び富山県の歴史を物語るものとして活用されれば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたり多大なご協力をいただきました上市東部土地改良区、地元湯神子地区のみなさまに心より感謝申し上げます。

平成4年3月

上市町教育委員会

例　　言

1. 本書は、富山県上市町湯神子地区に所在する湯神子A遺跡の発掘調査報告である。
2. 調査は、平成3年3月18日から同年3月30日まで実施した湯神子D遺跡を含む試掘調査と、平成3年5月8日から7月4日・同年10月14日から10月17日まで実施したA遺跡の発掘調査に区分されるが、本書はこれらの調査結果を併せて収録した。
3. 調査面積は、D遺跡250m²、A遺跡1,000m²である。
4. D遺跡は、県補助金を受け上市町が実施した(試掘調査)。A遺跡は、上市町教育委員会が、上市東部土地改良区の委託を受け実施したが、地元負担金については、上市町教育委員会が、国庫補助金・県費補助金を受けた。
5. 調査事務局は上市町教育委員会にあり、調査期間中、文化庁記念物課、富山県教育委員会(文化課・県埋蔵文化財センター)の指導を受けた。事務及び調査担当は、生涯学習課主任高慶孝が担当し、生涯学習課長荒川武夫が総括した。
6. 遺跡の整理、本書の編集・執筆は、調査担当者が行なったが、調査期間中及び本書の作成にあたり、下記の方々から有意義な指導・助言並びにご協力をいただいた。記して深甚なる謝意としたい。
富山県埋蔵文化センター主任狩野聰、久々忠義・池野正男・酒井重洋・橋本正春・財団法人富山文化協会埋蔵文化財係・神保孝造・立山町教育委員会社会教育課主事三鍋秀典・同嘱託瀬戸智子(順不同・敬称略)
7. 調査参加者は次のとおりである。
山崎典子(調査補助員)、亀井聰、野村裕一、葛山拓也、谷杉延子、榎木和子(以上富山大学学生)、川瀬重信、吉川成一、本松義雄、平川正雄、吉田盛太郎、成川定信、鳥津弥三郎、佐近ナミイ、高城登志子、高城富美子、高城準子、高城英子、古井利子、三鍋愛子、若木啓子、田中栄子、生駒小夜子、牧野ヨシキ、三輪光子、永原静江、古川アヤ子、山崎イミ子、種田富美子、林陽子(以上作業員)、久保久美子、大井邦子、橋本美智子、中村芳子(整理作業員)

目　　次

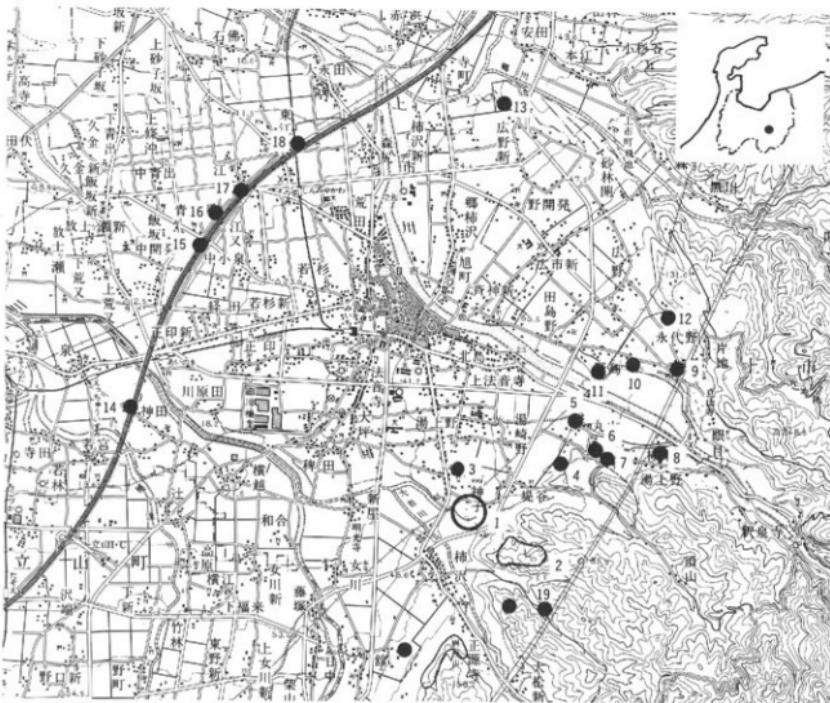
| | | |
|--------------|-----------|----|
| 序文 | 第6図　遺構実測図 | 8 |
| 例言 | 2. 遺物 | 9 |
| I　遺跡の環境 | 湯神子D遺跡 | 11 |
| 第1図　地形と周辺の遺跡 | 1. 遺構 | 11 |
| II　調査に至る経過 | 2. 遺物 | 12 |
| III　調査の経過と層位 | V　まとめ | 13 |
| 第2図　地形と区割図 | 引用・参考文献 | 13 |
| IV　調査結果 | 図版 | |
| 湯神子A遺跡 | | |
| 1. 遺構 | | |
| 第3図　遺構実測図 | | 5 |
| 第4図　遺構実測図 | | 6 |
| 第5図　遺構実測図 | | 7 |

I 遺跡の環境

湯神子A遺跡とD遺跡は、富山県中新川郡上市町湯神子に所在する(第1・2図)。遺跡の南には、白岩川の支流、大岩川、須山川が西流し、東には標高150~200mの山地がせまる。遺跡は須山川が形成した川岸段丘の奥まった所に立地し、南側が比高差約7mの段丘崖に面する。標高は50~52mでやや南西側に傾斜する。A・D両遺跡は直線距離で約60mと隣接している。

周辺には、繩文時代では、上市川沿いに、極楽寺遺跡(前期)・丸山A・丸山B・丸山Cの各遺跡(前期~中期)野島大門遺跡(中期)・永代遺跡(中期)・野島遺跡(後期~晚期)、町の北端を西流する郷川沿いに、本江広野新遺跡(後期~古墳時代)など町的主要河川により形成された河岸段丘や台地上に多くの遺跡が古地する。この時期以降の遺跡では、柿沢古墳群(古墳)・湯神子B遺跡(中世)・堤谷古窯跡(奈良)・龜谷古窯跡(奈良・平安)など、同一の台地や背後の山地、谷に数多くの遺跡が確認されている。今回の調査では、繩文時代の遺構・遺物の他、土師器や須恵器などの遺物も多く出土しており、これらの遺跡との関連も注目される。

本遺跡は、須山川沿いに立地しているが、これまでこの流域にそれほど多くの遺跡は確認されていなかった。しかし、1988年から実施されている遺跡詳細分布調査で新たな遺跡が発見されつつあり、本地域においても人々の生活跡が確認できている。今回の調査が上市の歴史を考える上で1つの大きな基点となるものと考える。



第1図 地形と周辺の遺跡 (1/50,000)

1. 湯神子A遺跡・D遺跡、2. 柿沢古墳群、3. 湯神子B遺跡、4. 堤谷古窯跡、5. 丸山A遺跡、6. 丸山B遺跡、7. 丸山C遺跡、8. 極楽寺遺跡、9. 野島大門遺跡、10. 永代遺跡、11. 野島遺跡、12. 永代野遺跡、13. 本江広野新遺跡、14. 神田遺跡、15. 中小泉遺跡、16. 蔵坂遺跡、17. 江上A遺跡、18. 東江上遺跡、19. 龜谷古窯跡

II 調査に至る経過

上市町湯神子地内には、平成元年から、土地改良総合整備事業が計画され4箇年計画では場整備事業が実施されることになった。しかしながら同地内には、湯神子A・湯神子Bの2遺跡の存在が知られており、上市東部土地改良区・上市町教育委員会・富山県教育委員会の三者により、遺跡の保護と工事計画との調整を計るための事前協議が催された。

協議では、まず計画地内の分布調査を実施することになり、平成2年11月に上市町教育委員会の手によって実施された。その結果、従来知られていた湯神子A遺跡、B遺跡の他に、C、Dの2遺跡を新たに確認した。

以上の調査結果をもとに再度三者による協議が行なわれ、B・Cについては現状保存の対策が講じられ、A・D遺跡については、道路、排水路で掘削を受ける部分について記録保存し、他は現状保存することで三者が合意した。

III 調査の経過と層位

第1次調査（平成2年度）

平成3年3月18日から同年3月30までの延べ7日間で実施した。D遺跡の範囲1000m²を対象にこのうち排水路で掘削を受ける250m²について遺跡の内容を確認した。

その結果、土壙・穴などが確認されたが、明確な住居等の遺構は確認できなかった。しかしながら、遺物は、縄文深鉢・浅鉢・土偶の他、古墳時代の土師器等も出土し、良好な残存状況を示した。かつてこの地区は桑畠があり施肥の際に深く掘削されており、遺構がそこなわれたものと考えられた。

なお、調査は、上市町教育委員会が試掘として対処し、県補助金を受けて実施した。

第2次調査（平成3年度）

平成3年5月8日から同年7月4日、平成4年10月14日から同年10月17日までの延べ40日間で実施した。A遺跡を対象に、主要道路でカットを受ける約1000m²の記録保存調査を実施した。

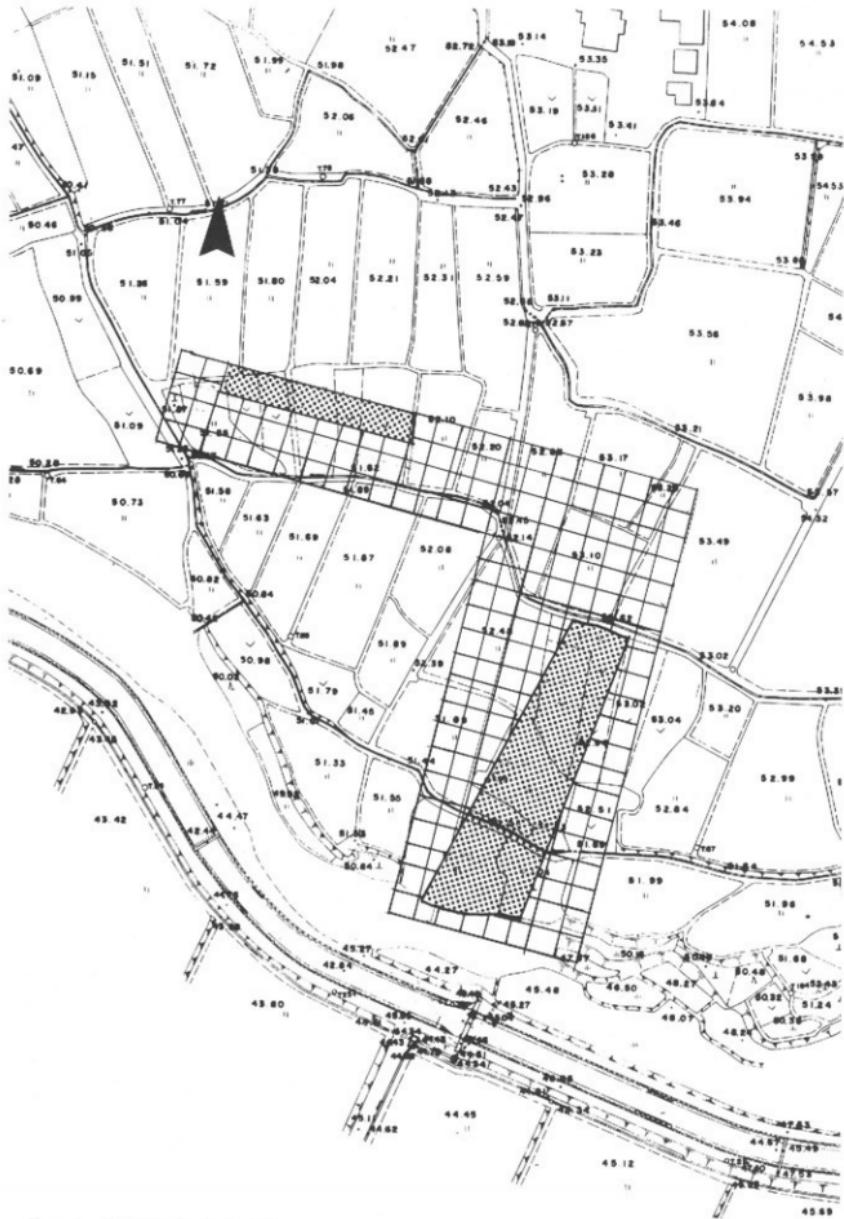
その結果、縄文時代中期を中心とした時期の住居跡3棟・土壙・穴217箇所、溝2本と、奈良・平安時代のものと考えられる土壙も確認された。

遺物は、縄文時代（中期）の深鉢・浅鉢の他、土偶や、石器などを多数出土した。また耕作土内から、旧石器も1点出土したため、一部、地山のローム層についても調査したが、遺物は出土しなかった。

層位

層序は、第1層耕作土層(10~30cm)・第2層灰褐色土層(約20cm)・第3層黒褐色土層(10~20cm)・第4層黄褐色土層・第5層黄灰褐色土層となっている。このうち第2・3層は遺物包含層で、南側の段丘直上ではほとんど見られなかつた。これは畑・墓地等、後代の擾乱によるものと考えられる。また第4・5層は地山層で、遺構はすべてこの地山層（第4・5層）の上面で確認できた。段丘直上面での段丘疊層までの深さは表土から約2mであった。

湯神子A・D両遺跡は、桑畠の耕作による掘削が随所で見られ、遺構が一部損傷を受けている部分もあり、確認を困難にしたが、基本的に層序が明確に区分できるため、奈良・平安時代の遺物は第2層及び2層の土が入り込んだ土壙で出土し、縄文時代の遺構・遺物との区分は容易である。しかし、D遺跡においては、縄文時代の遺物とそれ以外の遺物が逆転して出土する場合もあり、必ずしも層序から区分することはできなかつた。



第2図 地形と区割図 (1/1000)

IV 調査結果

湯神子A遺跡

1. 遺構（第3図、図版20～24）

調査により検出した遺構は、縄文時代と奈良・平安時代に属するものである。遺構は調査区全体で検出されるが、段丘の縁部に行くにしたがって少なくなる。

検出した遺構は、縄文中期の住居跡3棟と、穴220箇所、及び溝2条を検出した他、奈良・平安時代の穴3箇所を検出した。覆土の上層は、縄文時代の遺構では、黒褐色土が、奈良・平安時代の遺構については、灰褐色土が入る。

第1号住居跡（第3・4図、図版22の1）住居跡はX69、Y137地区付近で、段丘の中央部、今回調査した発掘区の北端に位置する。この住居跡は、全体に掘込みがなく、P2・3を含む土壌と、P1・6・9・10の柱穴、焼土を持つP7・8などから住居跡と確認した。規模は、これらの遺構の配置から考えて、約5×4mの不正円形のプランと考えられる。柱穴は60～80cm程度掘込まれ比較的しっかりしているが、径4cm前後でやや細い。P2・P3とその周辺から多量の縄文土器を出土している。出土した遺物は、中期前葉のものと思われる。P7・8の焼土は、か跡と考えたい。P7の焼土は50×30cmで厚さ8cm、不整形である。P8は15×15cmで厚さ5cm、円形のものである。P6の南に5号穴がある。遺物がややまとまって出土し、第1号住居に関連した施設である可能性が強い。

以上から、第1号住居跡は、作りがやや簡易で、そのあり方から一定の期間(季節)利用されたキャンプサイトであると考えたい。

第2号住居跡（第3・5図、図版21）住居跡はX72・Y145地区付近の段丘中央部、発掘区の中央西側に位置する。全体の半分を検出したにとどまるが、南北約7m、東西約5.5m(推定)の不正円形プランの住居跡と考えられる。住居の主軸はN-33°-Wの方位である。柱穴は床面から約15-35cmと全体的に浅い掘り込みである。主体をなす柱穴は、P1・3・6と考えられ、全体としては、6本前後の柱が主体をなすXY型〔橋本1976〕の配列の住居と考えられる。主軸上に1.2×1mの土壌があるが、かは検出されていない。周囲には幅15-25cm、深さ5-10cmの溝がめぐりそこから2-3cm掘り込まれて床面となる。全体としてあまり遺存状況はよくない。遺物は少なく、P2の覆土内から深鉢の口縁が出土したのみである。縄文や土器の焼成から中期に属すると考えられる。

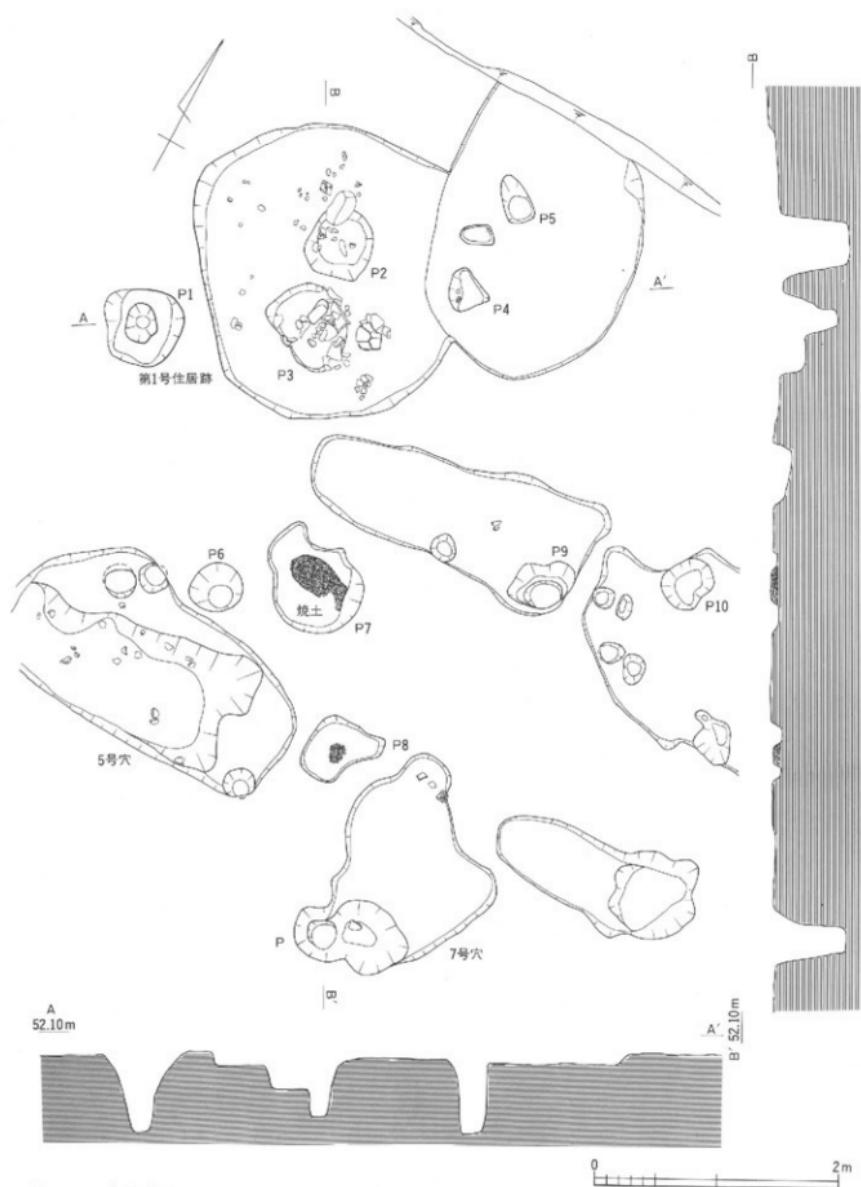
第3号住居跡（第3・6図、図版22の3）X74・Y152地区付近で段丘の中央部、発掘区の中央西側に位置しており、第2号住居跡の南側約6mにある。規模は約6×7mの円形に近いプランで、地山から約15cm程度掘り込んで床面としている。しかしながら、その外部に径70-100cm、深さ80-120cmの大きな柱穴P1・2・3・4・16が床面をとり囲むように連なっており、これを主体とした柱で考えると、6×10mクラスの大型の住居となる可能性もある。内部の柱穴P5・6・7・8・9・10・11・12・13は径25-65cmと大小あるが、深さは、40-50cmとほぼ一定で、第1号住居跡・第2号住居跡と比較しても、しっかりととした穴であると感じられる。主軸は、N-52°-Wの方位をとる。遺物は南側でややまとめて出土している。縄文時代の遺物で、中期前葉のものと考えられる。

穴（第3図、図版20-24）発掘区全体に粗密を持って分布する。特に意識的とは考えられないが、住居跡周辺にまとまる傾向が見られる。形状は径30-100cmで、円形、または長円形のものがほとんどである。遺物は少量であるが出土するものが比較的多い。このうち44号穴と52号穴から出土した縄文土器は同一個体と考えられ、周囲の穴のまとまりから住居跡である可能性が高いが、後生の擾乱があり、判然としない。

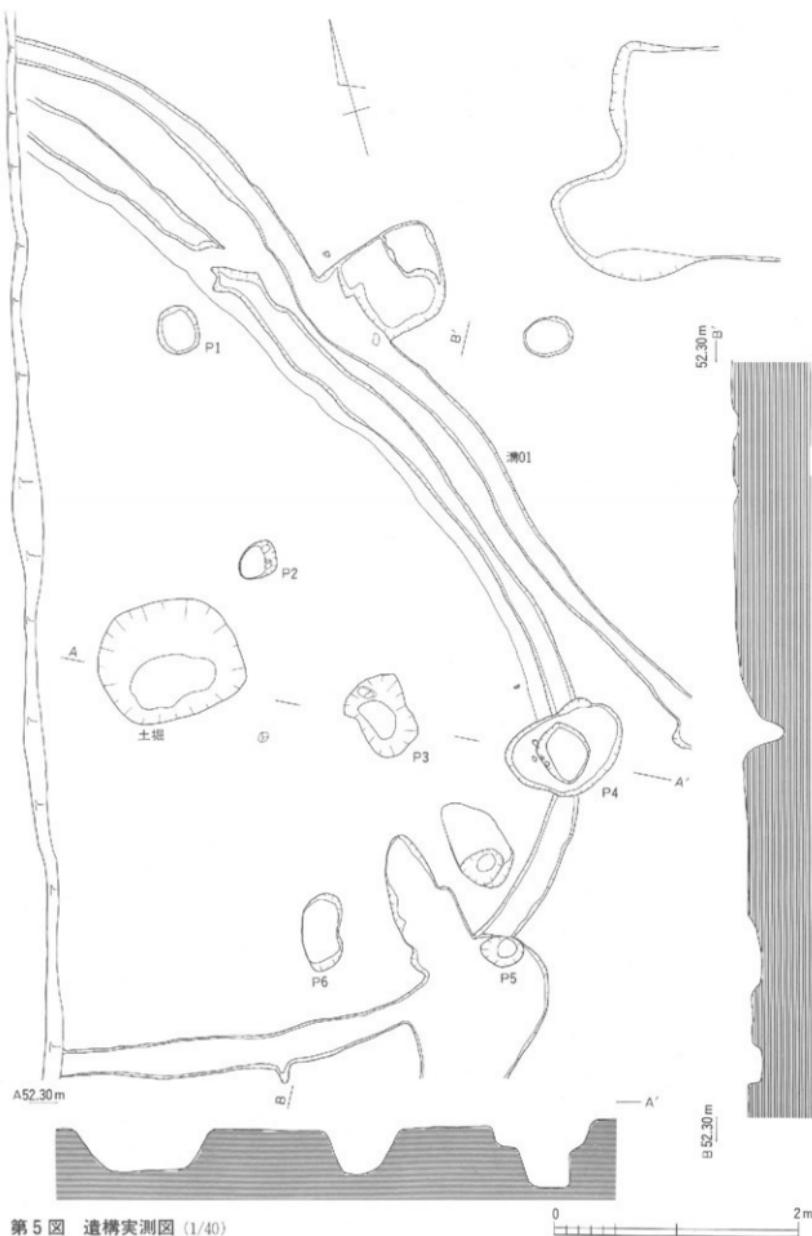
溝（第3図）第2号住居跡に伴うものの他に2条検出された。溝1は第2号住居跡北側から南西へ約15m伸びて溝底と地表面の高差がなくなり消えている。この溝は、第2号住居跡の東側にも住居跡が存在したことをうかがわせている。溝2は、発掘区南側を西から東に向かって伸びている。幅は80-50cm、深さ30-50cmでしっかりした掘削を持



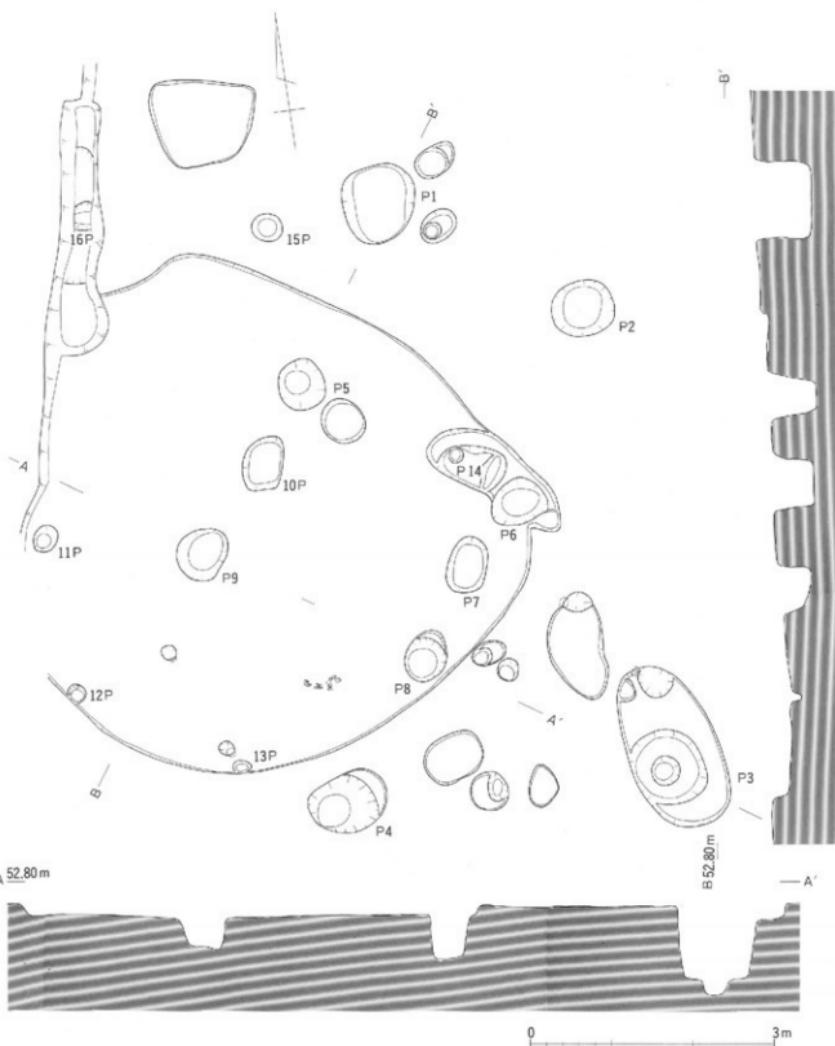
第3図 造構実測図、A遺跡・D遺跡 (1/300)



第4図 造構実測図 (1/40)
第1号住居跡及び5・7号穴



第5図 遺構実測図 (1/40)
第2号住居跡



第6図 造構実測図 (1/60)
第3号住居跡

つ。これより南側は約60cm地形が下がり、遺構が少なくなる。この溝からは、縄文時代の打製石斧が出土した。石質、形状から中期に属するものと考えられる。

奈良・平安時代の遺構(第3図、図版23の1)遺構はX65~67、Y43~48に集中して見られ、31・32・34号穴がある。31号穴は、一部風倒木痕により攪乱を受けているが径2mあまりの穴と考えられる。深さは約50cmである。32号穴は、径約60cm、深さ約30cm、34号穴は径約30cm、深さ30cmである。この3箇所の穴の周辺及び覆土内から多量の土師器・須恵器が出土している。

2. 遺物

遺物には、縄文土器・石器・土偶と、土師器・須恵器がある。遺物の中で最も多いのが縄文土器である。遺物包含層からの出土もあるが、遺構に伴うものが多く目につく。土師器・須恵器は、そのほとんどが、31・32・34号穴及びその周辺からの出土である。縄文土器はそのほとんどが中期のものと考えられる。土師器・須恵器は8世紀末から9世紀前半にかけてのものが多く、窯跡から直接運んだ、不整形の製品が多い。

A. 土器

出土した縄文土器は遺物整理箱でおよそ10箱分ある。そのほとんどすべてが、縄文時代中期前葉に属するものと考えられ、他に中期中葉のものが若干認められる。以下、遺構ごと、図版ごとに概略を述べる。

第1号住居跡(図版2の1~3・5、図版6の19~21・33、図版9、図版10)図版2の1~3・5はP2・3から出土している。1は深鉢の底部である。胴部からの残存であるが、縦位の半截竹管が数条降ろされ、蓮華文風の文様を作り出している。条と条の間の区画には不規則な沈線が施されている。2は縄文を施した深鉢の底部である。3は口辺部が内溝する深鉢である。口唇部に半円状の突起が付され、4条の半隆起線が横走する。頭部にも3条の半隆起線を横走させ、縄文地に浅い半截竹管で縦位の平行沈線を施している。胴部文様帯は縦位の半隆起線により区画文を施している。5は口径80cmの大型の深鉢である。口辺部文様帯は8条の半隆起線が横走し、口唇部と4条・7条目の隆起線には爪形文が施されている。胴部文様帯も二条の半隆起線を横走し、爪形文を施した隆起線を配しており、口辺部と胴部の間に無文帯を配する。頭部から胴部にかけては縦位に半截竹管が垂下し、B字状の文様が施される。

図版6の19~21・33はいずれも中期前葉の土器である。19は、深鉢の口縁部で三条の半隆起線文が見られる。21は縄文のみを施した粗製土器で、縫部を折り重ねている。33は、浅鉢の口縁で、口辺部に2条の隆起線を横走させ、その間に細かな蓮華状文を施す。

図版9は、16を除いてすべて深鉢と考えられている。1~15・19は口縁部である。1・2・3・9は、口唇部に蛇体状の突起が付され、爪形文が施されている。口辺部には数条の半隆起線を横走させ、頭部に縦位の隆起・突起で区画しその間に無文帯もしくは、蓮華状文を施している。6・7・11・13・14は口縁部に隆起線文を横走させるもので、6・7は口唇部に爪形文が施される。また、14は隆起線がね上がり突起となっている。4・5・8・10・12・13・15・19は縄文のみを施した粗製土器で、口唇端部を折り重ねるもの(4・5・8・10・15)と丸くおさめるもの(12半截竹管を施すもの(13・19))に分けられる。17・18・20~25は深鉢縫部で、縄文と数条に横走する半隆起線文で施文されている。26~30は、深鉢底部である。このうち27・30は底部まで縄文を施すが、他は見られない。

図版10は縦位もしくは横走する半隆起線文に爪形文を施したものである。器形は深鉢である。9・10・12~18・20・22は縦位の半隆起線文で配された区画文で、細かな刻みが施されている。11・23は細かい蓮華文が施されている。

第2号住居跡(図版8の25・30)出土した土器は2片で、いずれもP4の覆土内から出土した。25・30とも縄文のみで施文された粗製の土器で、口唇端部に半截竹管文を施すものである。

第3号住居跡(図版2の4、図版6の36、図版8の24)出土した土器は、いずれも住居跡北側で、ややまとまって

出土している。図版2の4は、円筒形の胴部を持ち口辺部がやや内屈するキャリバー状を呈する深鉢である。第3号住居跡から出土した土器で唯一復元できたものである。文様構成は口辺部文様帯は半截竹管文で、胴部文様帯は縄文で構成している。口辺部文様帯は口唇部下に三条の半隆起線を横走させ、口辺部には浅い半截竹管で縦位の平行沈線を引き降ろした後、4単位で突起を配している。頭部と胴部に2条ずつの半隆起線がめぐり、その間と以下は斜縄文が施されている。図版6の36もキャリバー状の深鉢で、口辺部がやや内屈するものである。口唇部に横走する隆起線文を配しその下は蓮華状文が施されている。図版8の24は、縄文のみで施された粗製の土器で、口唇部に半截竹管が施されており外にくびれている。

穴(図版2の6・7、図版8の1~23・26~29・31~33、図版の9)図版2の6は、52号穴、44号穴の覆土内からそれぞれ出土した。波状口縁の深鉢形土器である。口辺部文様帯は半隆起線で、三角形の区画を描き、その後、斜位に刻み目を施している。さらに胴部は頭部に半隆起線を横走させた後、斜縄文を施し、浅い半截竹管で縦位の沈線を引き、区画文が施されている。中期前葉から中葉にかけてのものと考えたい。7は粗製の深鉢で、斜縄文が施されたものである。図版8の1~8は第5号穴から出土した。1・3・8は蓮華文が施される。1は口縁に半円形の突起を付す。2・4・5は、横走する半隆起線が見られる。6・7は深鉢底部である。7には網代痕が残る。9~11・33は214号穴から出土した。9・11は粗製の土器で9は口辺部が丸くおさまる。11は、半隆起線が見られる。33は口縁でややくびれている。12~20は22号穴から出土した。12~17は縦横に走る半隆起線により区画された文様に縄文あるいは刻み目を入れている。18は粗製の土器で口唇部に半截竹管が見られる。21・22は7号穴から出土した。21は円形の突起が一对貼付される。23は19号穴から出土した。26は34号穴の出土で、口縁端部が丸く内湾している。蓮華文が施されている。27・28は44号穴から出土した。27は縦横の半隆起線で区画され、縄文が施されている。28は縄文が横走する。29は38号穴から出土している。縦位の半隆起線による施文である。32は103号穴からの出土土器である。口縁が大きくなり出し、口唇部に窪みが見られる。

包含層の遺物(図版5・図版7)包含層からの出土遺物は主に第1号住居跡の東側の部分と、第2号住居跡の東側に多く見られた。図版5の1~13は同一個体の可能性が強い。文様は半截竹管による降起線文が満巻状に口辺部をめぐり、溝の中心となる隆線に爪形文が施されている。10・12・13には三叉文が見られる。中期中葉の色彩が強い。14~28・31・33~38は、縦横に走る半隆起線に区画された中に刻み目・縄文などで施文されている。このうち20には細かな蓮華文が見られる。37は口唇部がはり出し、窪みが施される。中期前葉のものと考える。29・30は深い鉢の突起部分である。図版7の1~4・7・8・11・14・15・16は縦横に走る半隆起線による施文で、1~3・7・14・16は区画文内に縄文が見られる。5・6・13は、縄文による施文である。5・9は斜縄文、6・13はそれぞれ縦位・横位の羽状縄文が施されている。10~13・20~24は深鉢の底部である。17~19は、台付土器の頭部である。内面にススの付着が認められる。

土偶(図版8の37)本遺跡で1点のみ出土した。出土地点は、X68・Y150で、第2号住居跡と第3号住居跡の中間地区である。土偶は妊娠土偶で正中線を残す。残存部位は頭部と腹部で脚部は欠損している。頭部と腹部は同一の粘土塊で作られているが、脚は別で、腹部の下に脚部との結合のためのソケット状の穴がみられる。頭部下側面から腹部にかけて粘土紐による腕の表現が見られ、凹落しているもののその痕跡から、正中線下端で腹部をかかえるように手を組んでいる。県下における類例は八尾町長山遺跡(中期前葉)に見いだされる。

弥生時代～古墳時代(図版11の10~13)10・11・12は器台・高杯である。10は器台の杯部で丸くおさまる口縁に粘土帶を貼り付、有段口縁としている。11・12は高杯の脚部である。内面をヘラ状工具により調整されている。13は壺の頭部である。いずれも月影式期に属するものと考える。

奈良・平安時代(図版3、図版11の1~9・14~19、図版12の1~19)図版3の16・19~22は、土師器である。16

は楕形土器、19は壺形土器の底部、20～22は壺である。16・20～22の口縁端部の形状、及び21・22の内面ヘラ削りから、8世紀末から9世紀前半にかけてのものと考える。1～15・17・18は須恵器である。1～5は杯蓋、6～15は杯身、17・18は小型の瓶である。杯蓋の紐は乳頭状の突起を残すもので、端部が玉縁状をなす4・2、やや古い様相の5・3があるが、8世紀末から9世紀前半におさまるものと考える。このうち4は蓋頂部から縫部に至る部分に、杯の高台を逆さにつけたような輪状の突起があり、注目される。滑川市万年寺谷遺跡に類例を求めることができる。
〔舟崎1976〕。杯身はいずれも作りが極端に悪い。杯蓋にもいえることだが、いずれも窯での焼き損じの品を持ち込んだものと考えられる。口縁端部、高台の特徴から9世紀前半のものと考える。図版11の1～9・14～19はいずれも土師器である。1～3は楕、4は壺の耳、5～9・15～19は壺、14は鉄鉢である。楕・壺とも9世紀前半のものと思われるが、14の鉄鉢は、いわゆる黒色土器で、内面を非常にていねいにヘラ磨き調整を加えている。図版12の1～19はいずれも須恵器である。1～8は杯蓋、9・13～19は杯身、10・11は鉄鉢、12は長頸壺の頸部である。2・4などに見られるやや古い時期も含めて全体は8世紀末から9世紀前半に属する。

以上だが、前述のように、須恵器はいずれも焼き損じ品で変形しており、特に杯身・杯蓋類はまともな品がほとんど見られない。これは近くの窯からの持ち込み品と考えられ、年代及び立地から、柿沢地内に所在する亀谷古窯の製品であると考えられる。

近世（図版12の20～23）20は近世瓦、21は青磁、22は越中瀬戸、23は越前の擂鉢である。

B. 石器

旧石器（図版4の7）石材は硬質頁岩である。一部欠損が見られるが、全長約7cm程度である。上部を打面調整が見られる。スパールと考えられる。

打製石斧（図版13の10、図版14の1～4）原材の石質には、砂岩・安山岩・粘板岩などがあり、平面形態には、短冊形・分銅形・撮形がある。このうち、2は22号穴、4は溝1、5は第3号住居跡、6は第1号住居跡から出土している。

磨製石斧（図版13の10、図版14の1～4）原材の石質はいずれも蛇紋岩である。平面形態は短冊形と撮形がある。このうち図版13の10は、蛇紋岩の小石を磨いたもので、石器製作途上のものと考えられる。図版14の2は、表面に擦切り痕を残している。図版14の3は第2号住居跡からの出土遺物である。

擦石（図版14の7～9、図版15の3～6、図版16）中型・小型のものが多く、平面形は、楕円形・長円形のものが見られる。中型のもの（図版16の1～6）は主に側縁部に使用痕が見られ、他の小物のものは、表裏の平面に見られる。石材は凝灰岩と砂岩が使用されている。図版14の7、図版16の2は第1号住居跡、図版15の6は第2号住居跡、図版14の8は3号住居跡から出土している。

凹石（図版14の5・6、図版15の7～9）石材はいずれも砂岩である。図版14の5・6は比較的大型で、凹を表面に1個、図版15の7～9は小型で凹を表裏の平面に1～2個施されている。

この他に、図版4の8のフレークが1点出土している。石材は黒曜石である。

湯神子D遺跡

1. 遺構（第3図、図版25）

縄文時代と弥生時代末から古墳時代にかけての穴39箇所を検出したが、後生の攪乱を全体に受けており、遺構間の関係を明確にすることはできなかった。

P1～3・5・6の上層、及び覆土内からは、縄文土器が出土している。時期は中期前葉から中葉にかけてのものと考えられる。特にP5上層では、河童形の土偶が出土している。P4・7・8からは、弥生時代末から古墳時代に

と考えられる。特にP5上層では、河童型の土偶が出土している。P4・7・8からは、弥生時代末から古墳時代にかけての遺物が出土している。特にP8では有段口縁の壺型の土器がまとめて出土している。

2. 遺物

遺物には縄文土器・石器・土偶と弥生時代から古墳時代の土器がある。出土地区は分散的で、遺構に伴うものあまりない。以下、遺物ごとに概略を述べる。

A. 土器

縄文時代（図版4の1、図版17、18の1～15）出土した土器は、深鉢と浅鉢、台付き土器である。図版4の1は浅鉢土器である。口辺部文様帶は、爪形文を施した半隆起線で区画した内部に半截竹管文でさらに施文されている。区画は2区画が3単位で構成され、各単位ごとに一对の円形の突起を貼り付けている。以下体部は、縄文地に、半截竹管で口辺部に対応するように区画文が施され、やや浅い半截竹管で、縦位の沈線が施文されている。図版17の1～24は、隆線により施文される。このうち1～3・7～9は、縦横に走る半隆起線文で区画された中に縄文を施したものである。4～6・10～14は、波状口縁の深鉢土器と考えられる。6は口縁部である。口縁部から三条の半隆起線が走り、波状口縁の頂部から逆しの字、もしくは渦巻状に爪形文を施した半隆起線文がめぐる。中央に一对の円状の突起を付す。この他、19には玉だきの三叉文が見られる。中期中葉の特徴が見いだされる。25は脇部のはり出した鉢の底部で縄文を貼り押した文様が底部に施されている。26は台付土器の台部分で、内面にススの付着が認められる。図版18の1～15は、縄文、半隆起線文により文様を構成する。1・2は粗製の土器の口縁で、いずれも口辺部が折り重ねられており、やや内湾する。5～7・10は半隆起線文による施文で、5・10には刻目が施されている。15は、脇部のややはり出した深鉢の底部で、一部に半隆起線文が見られる。

土偶（図版18の16）出土位置はP5の上層である。出土した部位は頭部から胸部で以下は欠損している。この土偶は、板状の胸部に立体的な頭部が付いており、頭頂部が皿状のいわゆる河童型土偶といわれるものである。頭頂部前側には一对の渦巻状の表現が見られる。側頭部から後頭部、腕部上面には斜縄文が施されている。腕部は上部にヘラ状工具による玉だき三叉文が見られ、頭部直下までのびている。県下では、八尾町長山遺跡にその類例が求められる。

弥生時代から古墳時代（図版4の2～6、図版19）出土した土器は、壺、鉢、甕、高杯、器台がある。以下図版ごとに概略を述べる。図版4の2は甕である。口縁が有段口縁でやや外反する。内面、外面ともナデ調整が施されている。3は椀である。高台部がやや浅く、口唇部に細かい沈線がめぐり、口辺部にハケ目が見られる。4は小型のコップ状の壺で、口辺部がやや大きくなり出している。5は大型の鉢で、口辺部が有段で大きく外反し、はり出すタイプのものである。内外面ともヘラミガキ調整が行なわれている。6は器台である。脚がやや長く、杯部もあり大きくはり出さない。弥生時代後期のものと考える。

図版19の1～8は、壺の口縁部である。いずれも有段口縁である。このうち1は口縁にハケ目が見られる。5は有段口縁の幅が広く、やや外反する。甕の口縁は直立ぎみで、いわゆる「く」の字状の口縁は出土していない。22・23・30は甕である。このうち22は三角状の断面を持つ隆帯が貼り付けられたものである。30は長頸甕の頭部である。9～21・25・29は高杯、もしくは器台である。9・11・13は端部が外反ぎみである。10・12は端部がやや内湾する。17～19は杯部に有段状の陵がある。特に18は大きく外反してはり出すタイプのものである。14～16は、杯部口辺が貼り付けられるものである。29は杯の台部で、幅の広い台部に円形の粘土塊をはり付けたものである。

以上からこの時期の土器は法仏式期から月影I式期〔谷内尾1983〕に比定され、主体は月影T式期にあるものと考えられる。

V まとめ

前章までに述べた点と問題点を要約し、今回の調査のまとめとする。

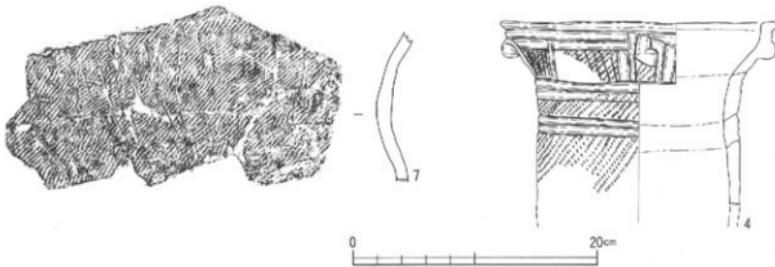
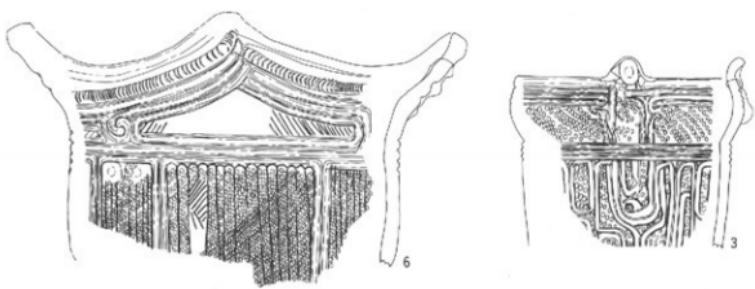
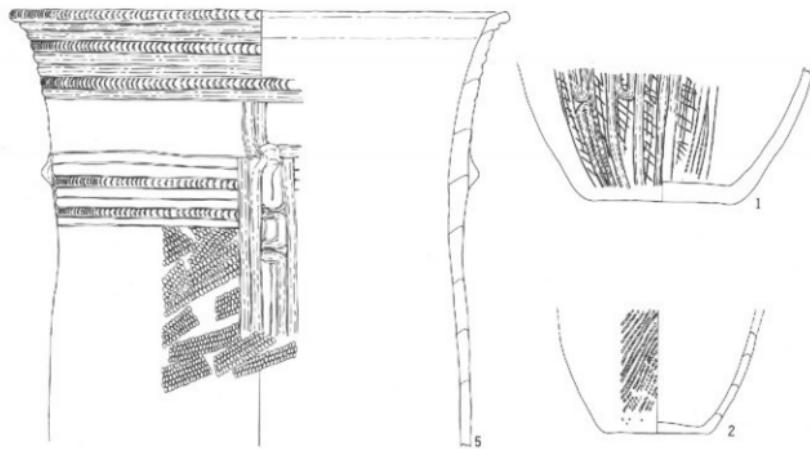
1. 湯神子A・D両遺跡は、上市町湯神子地内に所在し、須山川、大岩川によって形成された河岸段丘上に立地する。遺跡は縄文時代～奈良・平安時代にかけての複合遺跡であり、段丘面全体に分布している。
2. 調査では、縄文時代中期前葉の住居跡3棟の他、220余りの穴を検出した他、D遺跡では弥生時代から古墳時代にかけての穴が、A遺跡では奈良・平安時代の穴なども検出された。このことから、縄文時代中期前葉は、やや分散的に段丘上に遺構が見られるが、弥生時代から古墳時代はD遺跡に、奈良・平安時代はA遺跡に集中して検出される。
3. 遺物には縄文時代中期前葉の土器・石器・土偶が見られるが、第1号住居などキャンプサイト的な性格を持つ遺構に伴うものもあり、他の同時期の遺跡との関係を分析する必要がある。またD遺跡における弥生から古墳時代の遺物は月影I式にその主体が求められるが、遺跡背後の山地に所在する柿沢古墳との関係を考える必要があるものと考える。奈良・平安時代の遺物は8世紀末から9世紀前半に属するが、変形した製品が多く、柿沢地内の亀谷窯から持ち込まれたものと考えられる。遺物には鉄鉢などの仏具が含まれており、寺社などの存在が伺われる。

引用・参考文献

- カ 上市町 1970『上市町誌』
- ク 久々忠義 1986『富山県における「月影式」土器について』『シンポジウム「月影式」について』石川考古学研究会
- コ 小島俊彰 1974『北陸の縄文時代中期の編年一戦後の研究史と現状一』大境第5号
小林達雄 1977『日本陶磁器全集3 土偶・埴輪』
- シ 神保孝造・岡上進一・松本幸治 1977『富山県砺波市巖照寺遺跡緊急発掘調査概要』 富山県教育委員会
神保孝造 1985『Ⅲ調査の概要 3 縄文時代 (3)出土遺物 C 土製品 (a)土偶』・『IVまとめ 3 縄文時代中期前葉の土偶について』『富山県八尾町長山遺跡発掘調査報告』八尾町教育委員会
神保孝造・橋本正春・飯田勉・島田修一・塙田一成 1985『富山県八尾町長山遺跡発掘調査報告』八尾町教育委員会
- ハ 橋本 正 1976『堅穴住居の分類と系譜』考古学研究第23卷第3号
- フ 舟崎久雄 1976『V遺物の概要』『富山県滑川市万年寺谷遺跡発掘調査報告書』 滑川市史 1979 滑川市史編さん委員会
- ヤ 谷内尾善司 1983『北加賀における古墳出現期の土器について』『北陸の考古学』石川考古学研究会
- ヨ 吉岡康暢 1967『北陸における土師器の編年』『月刊考古学ジャーナル』No. 6 ニューサイエンス社
吉岡康暢 1983『東大寺領横江庄遺跡』松任市教育委員会 石川考古学研究会



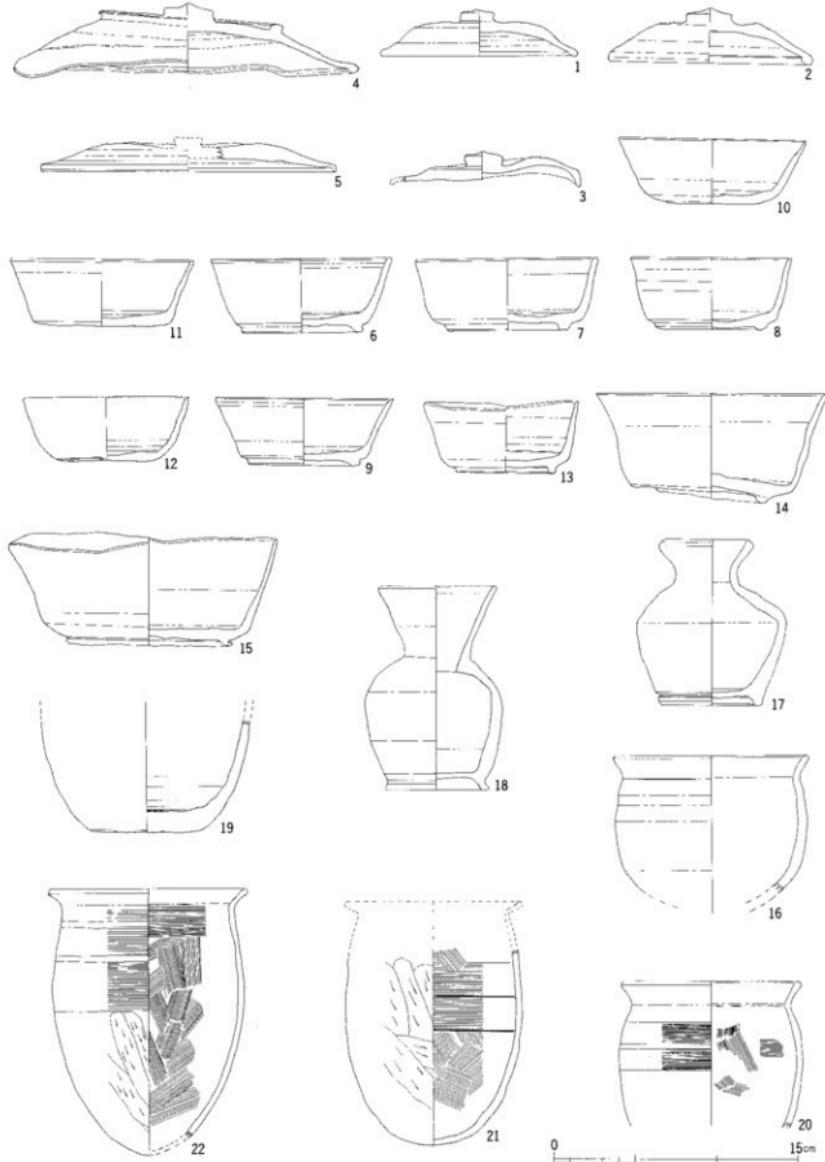
図版 1 湯神子A 遺跡周辺航空写真



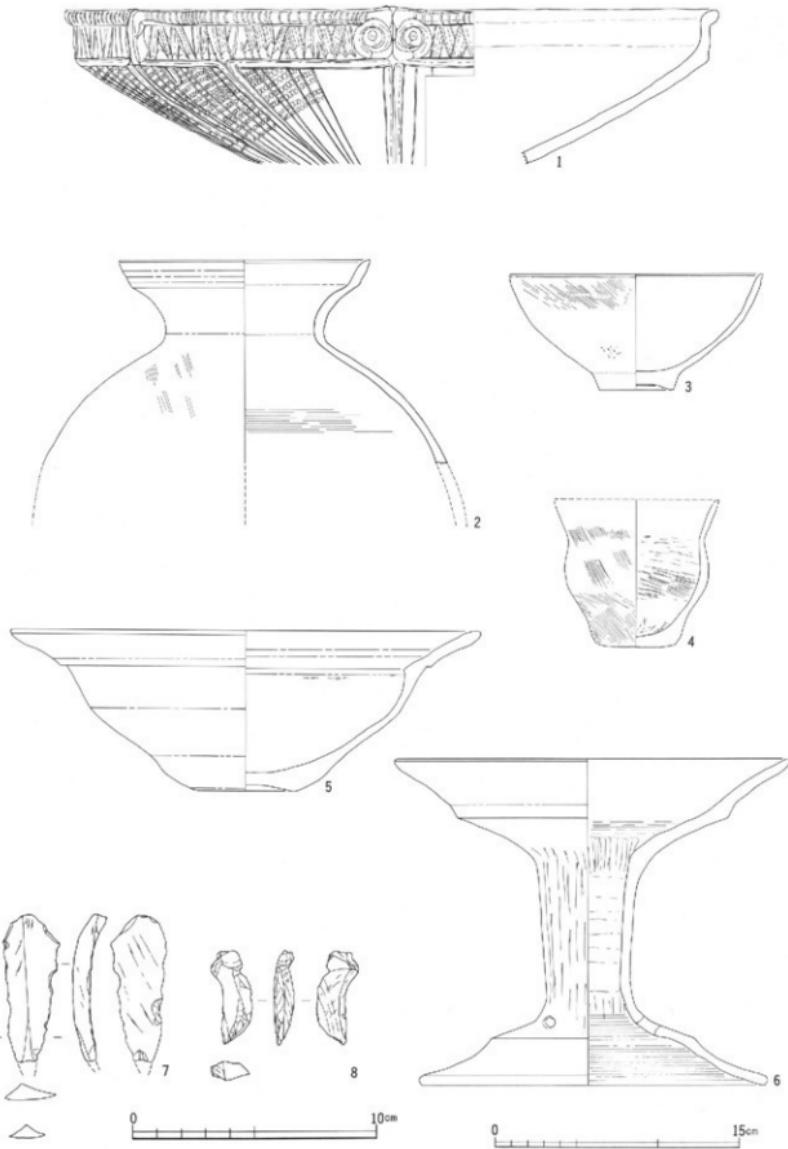
図版2 遺物実測図(A遺跡)(1/4)

縄文土器

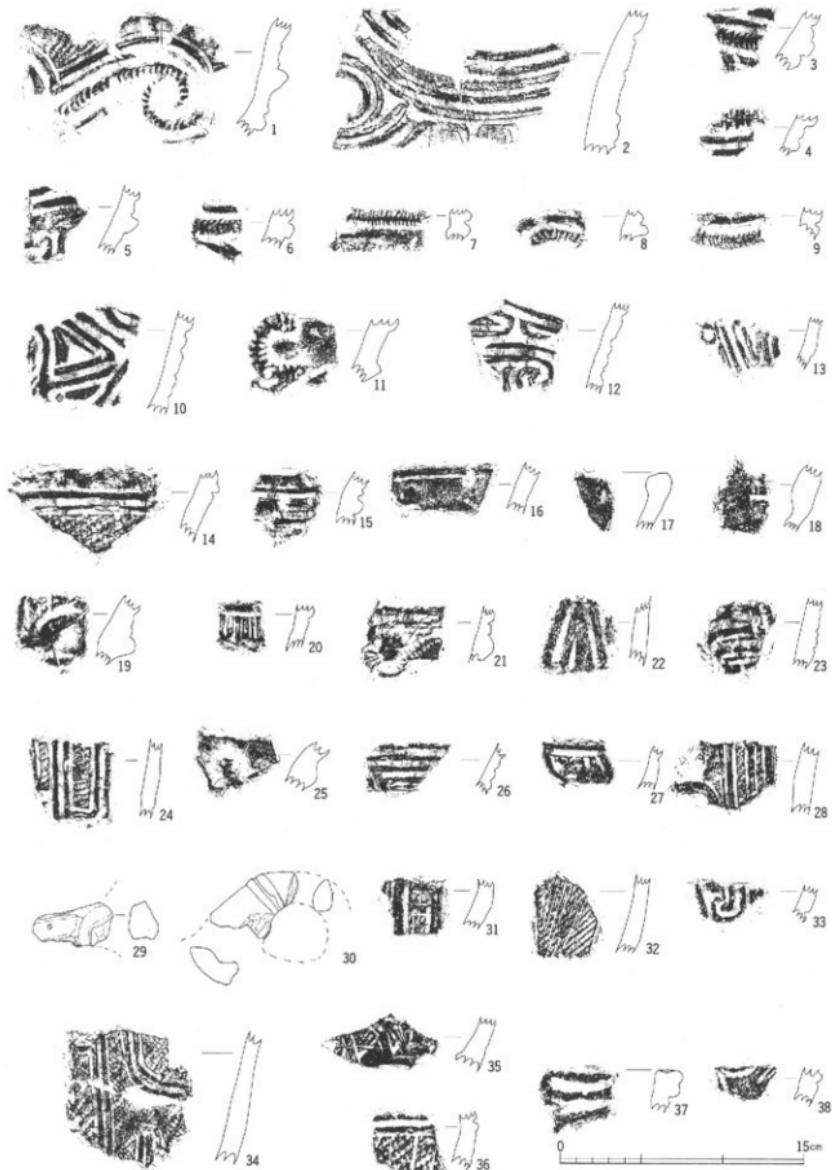
1~3・5:1号住居跡, 4:3号住居跡, 6:52・44号穴, 7:38号穴(図版26参照)



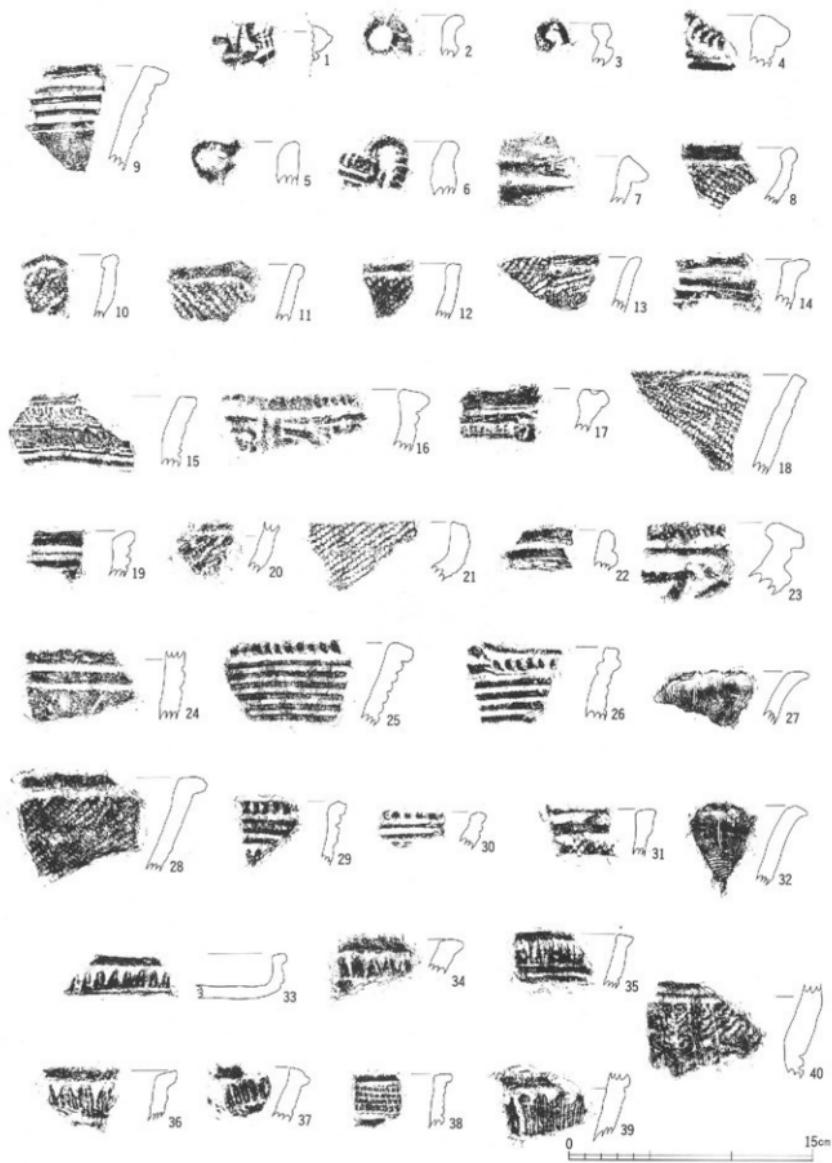
図版3 遺物実測図(A遺跡) (1~19:1/3, 20~22:1/6)
奈良・平安時代遺物(図版27参照)



図版4 遺物実測図(D遺跡)(1/3) 1:縄文土器, 2~6:弥生・古墳時代遺物,
(A遺跡)(1/2) 7・8:石器 (図版27・28参照)



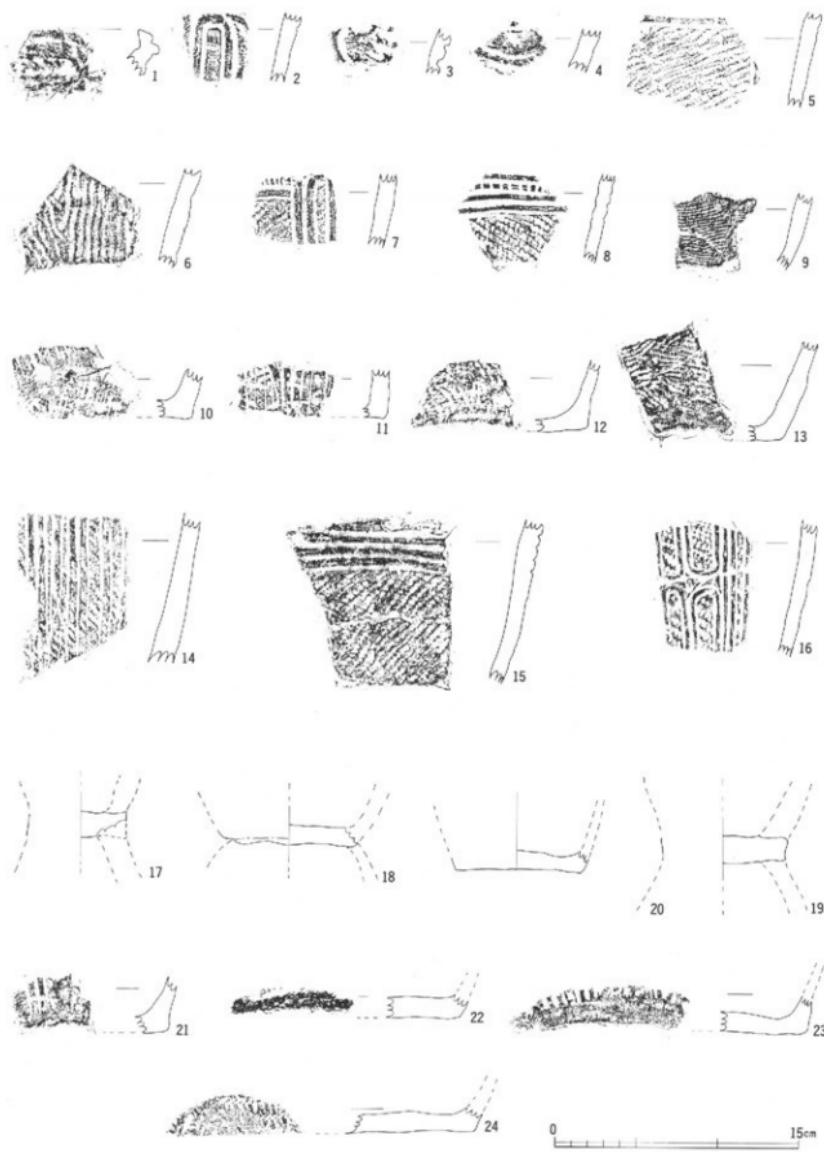
図版5 遺物実測図(A遺跡)(1/3)
縄文土器(図版29参照)



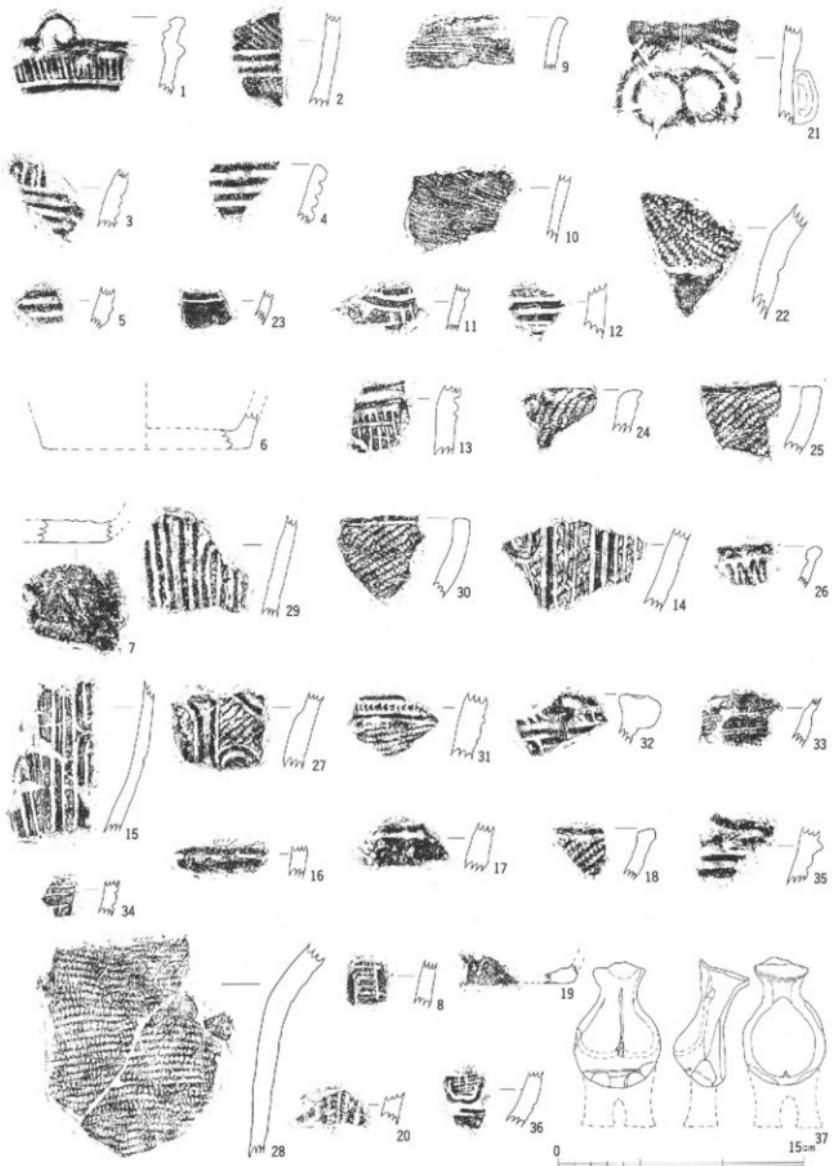
図版6 遺物実測図(A遺跡)(1/3)

縄文土器

19~21・33:1号住居跡, 36:3号住居跡, (図版30参照)



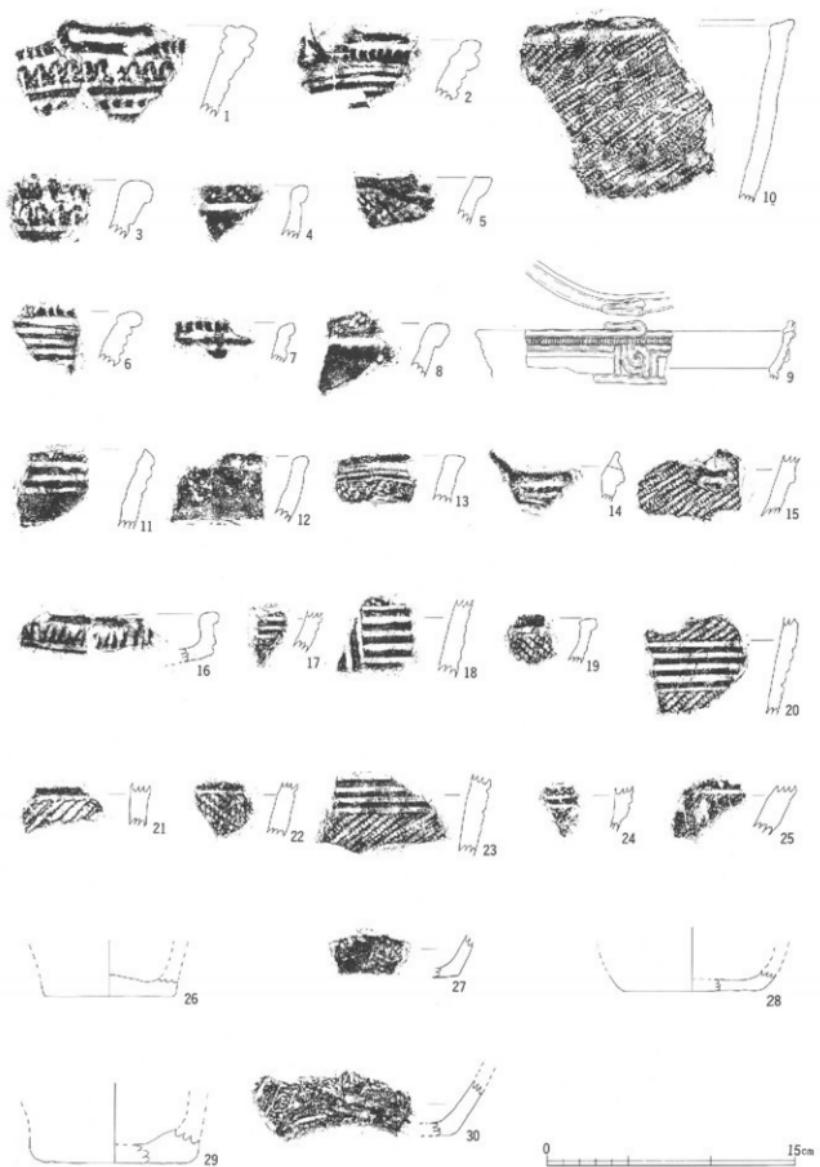
図版7 遺物実測図(A遺跡) (1/3)
模文土器(図版31参照)



図版8 遺物実測図(A遺跡)(1/3)

縄文土器

1~8: 5号穴, 9~11·33·21 4号穴, 12~20: 22号穴, 21·22: 7号穴, 23: 19号穴, 24: 3号住居穴P8,
25·30: 2号住居跡P4, 26: 34号穴, 27·28: 4号穴, 29: 38号穴, 31·36: 217号穴, 32: 103号穴, 34·35: 混
乱内, 37: 土偶, (図版32参照)

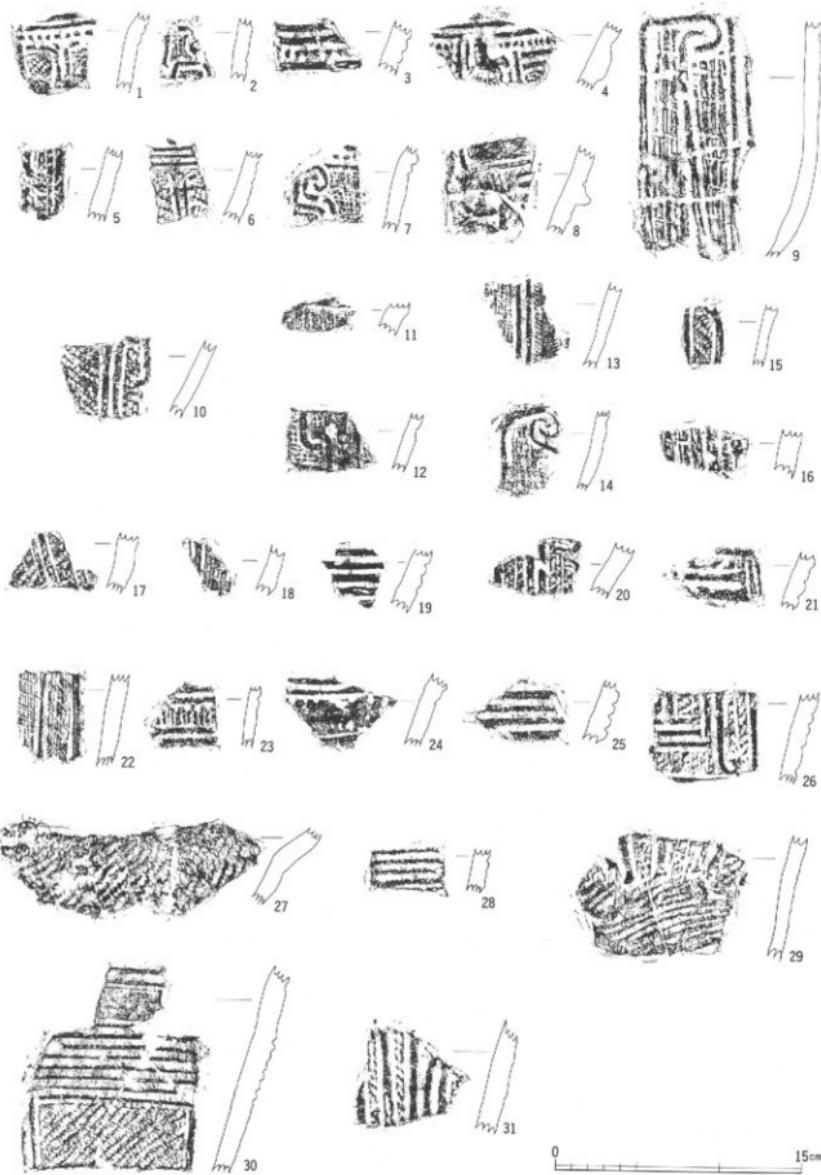


図版9 遺物実測図(A遺跡) (1/3)

縄文土器

1号住居跡(図版33参照)

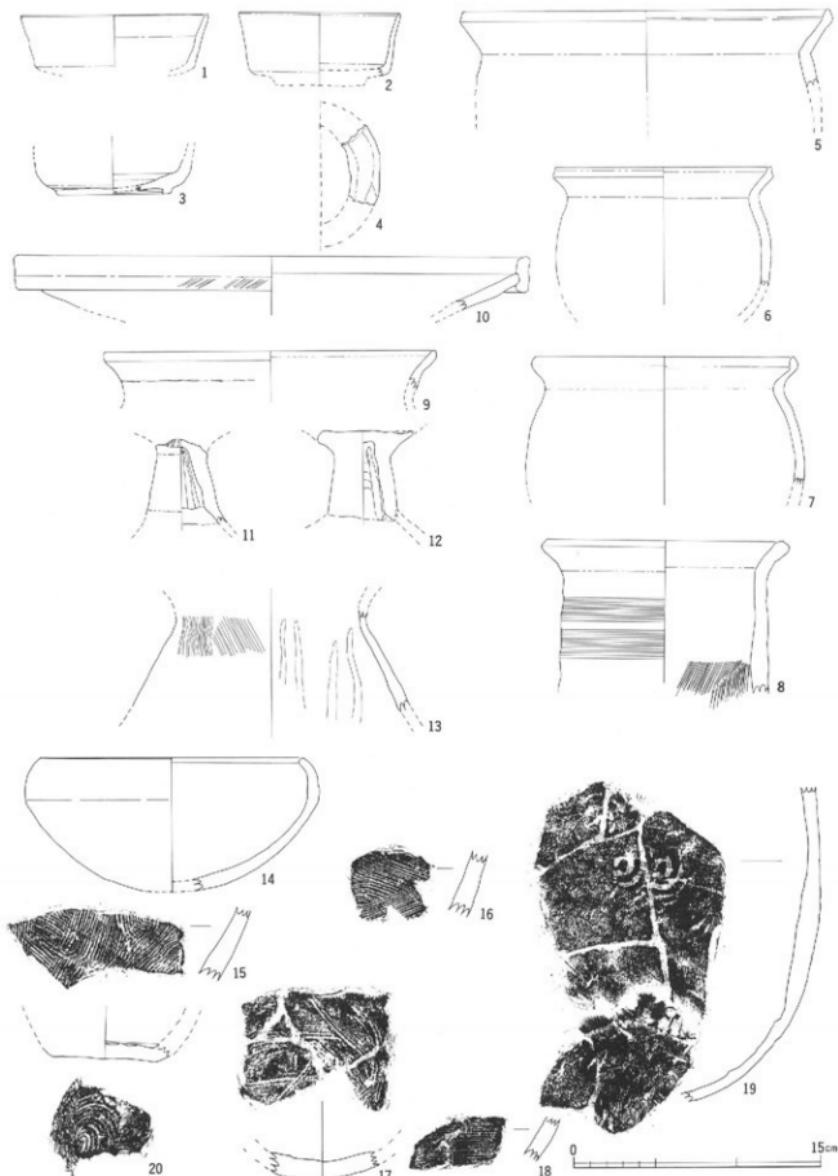
0 15cm



図版10 遺物実測図(A)遺跡(1/3)

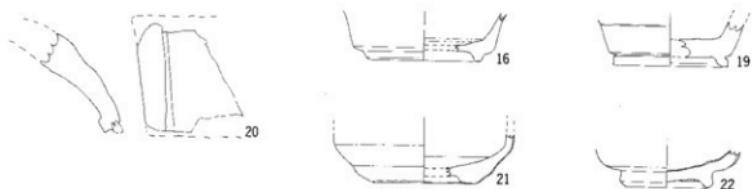
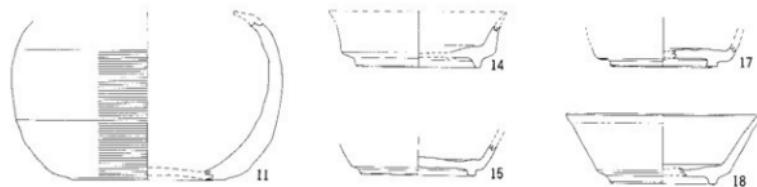
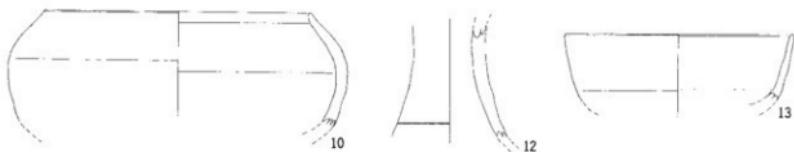
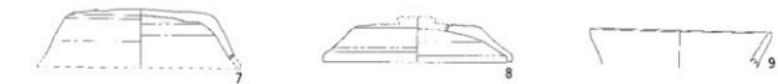
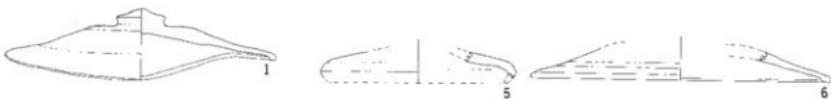
縄文土器

1~8・10~31:1号住跡, 9:7号穴,(図版34参照)

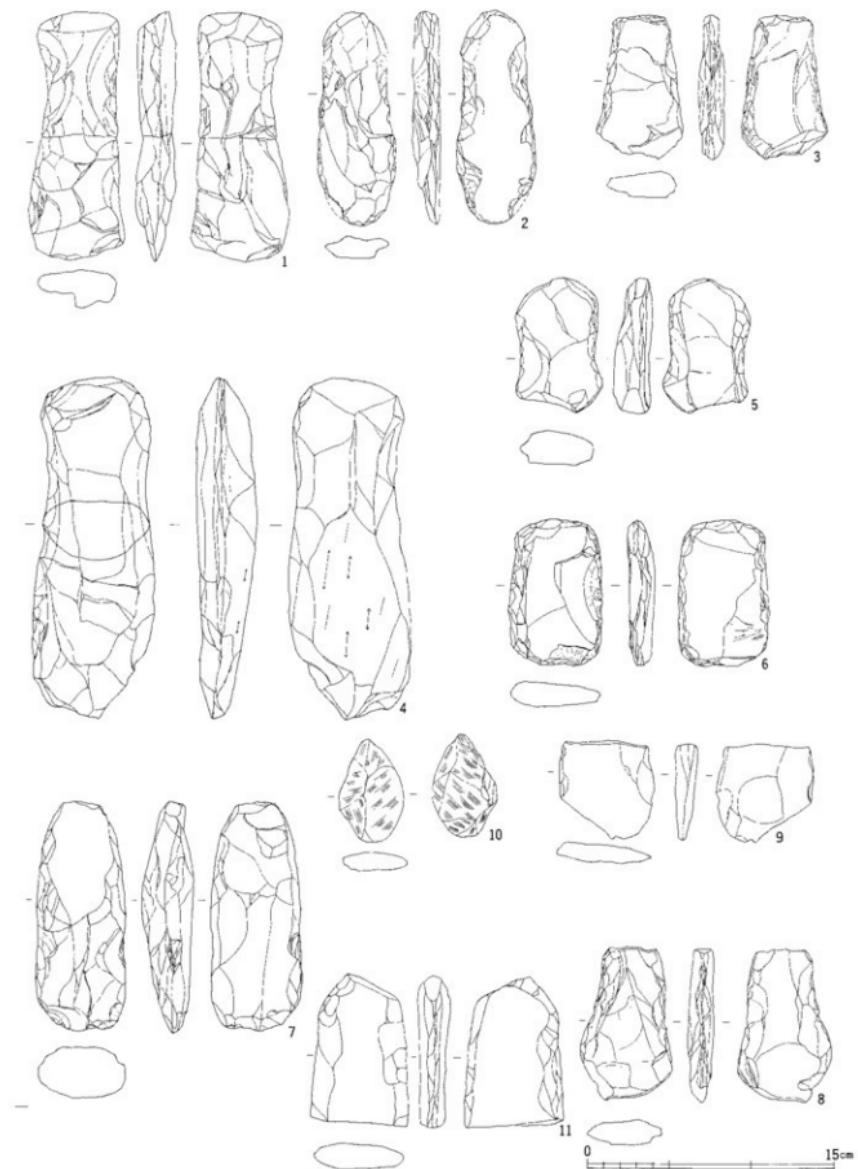


図版11 遺物実測図(A)遺跡(1/3)

弥生・古墳時代、奈良・平安時代遺物
31号穴。(図版35参照)



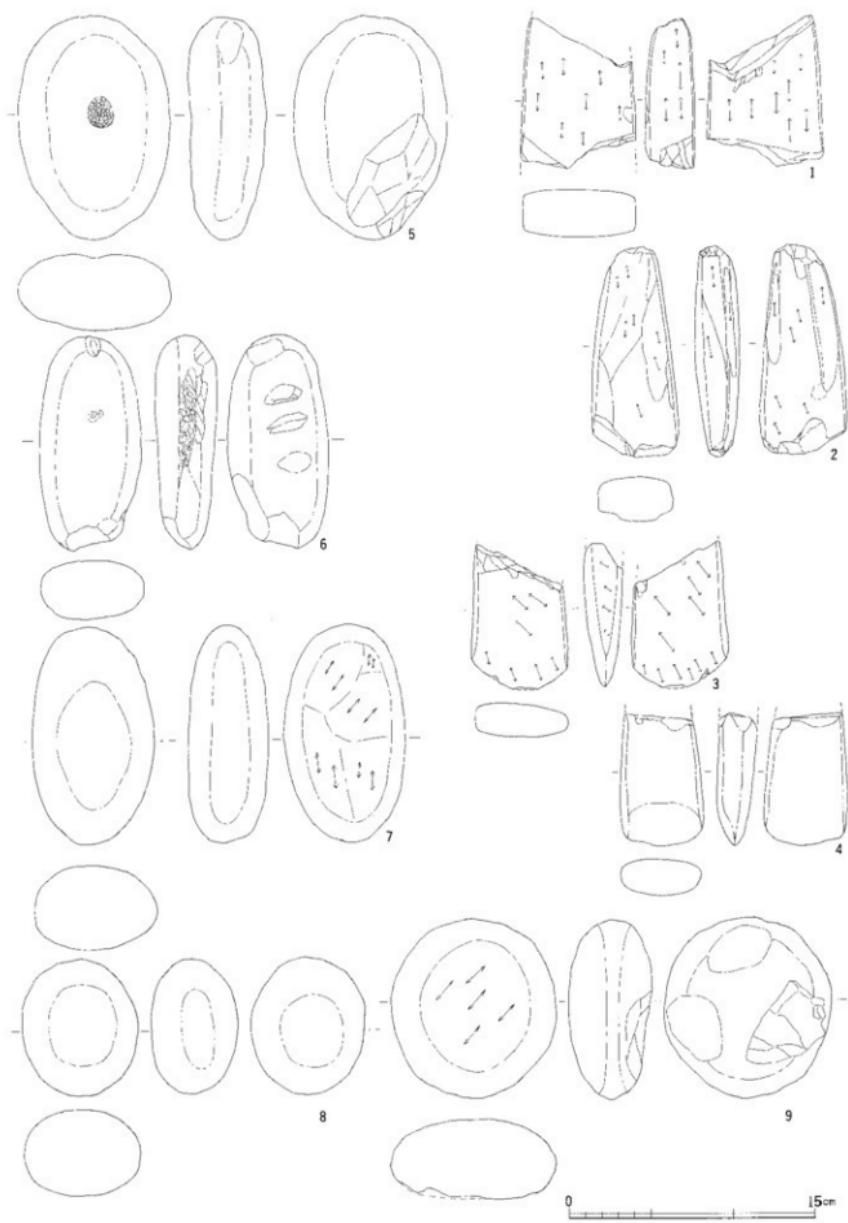
図版12 遺物実測図(A遺跡) (1/3)
奈良・平安及び中近世遺物 (図版36参照)



図版13 遺物実測図(A遺跡)(1/3)

石器

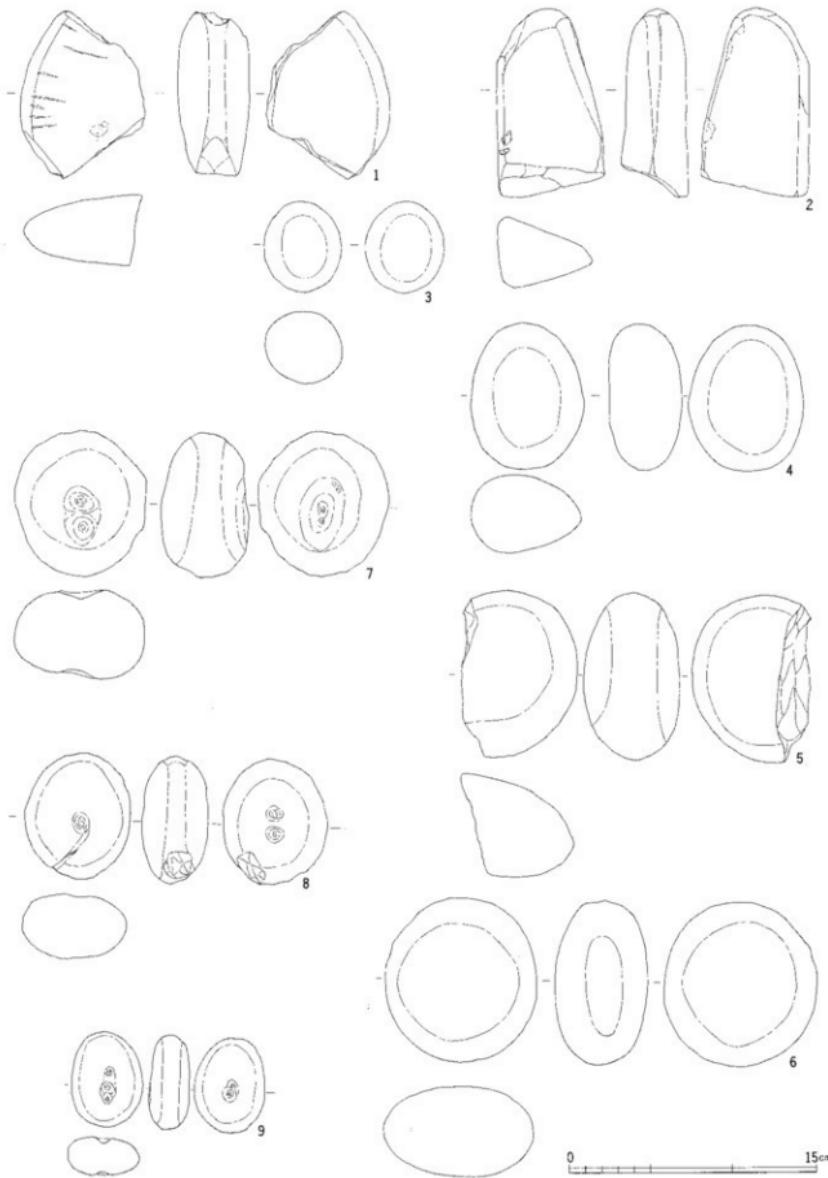
2:22号穴, 4:溝1, 5:3号住居跡, 6:1号住居跡。(図版37参照)



図版14 遺物実測図(A遺跡)(1/3)

石器

3:2号住居跡, 7:1号住居跡, 8:3号住居跡, (図版37・38参照)

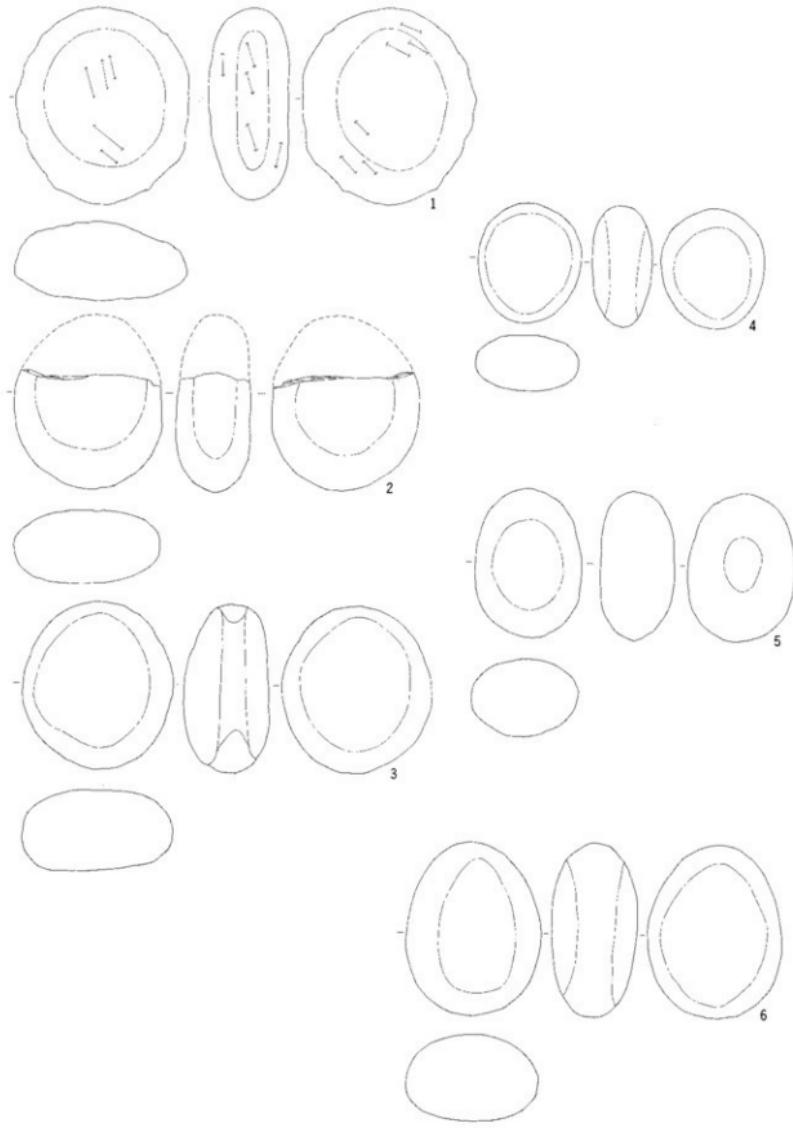


図版15 遺物実測図(A遺跡) (1/3) (3:1/6)

石器

1:1号住居跡, 6:2号住居跡, (図版38・39参照)

0 15cm

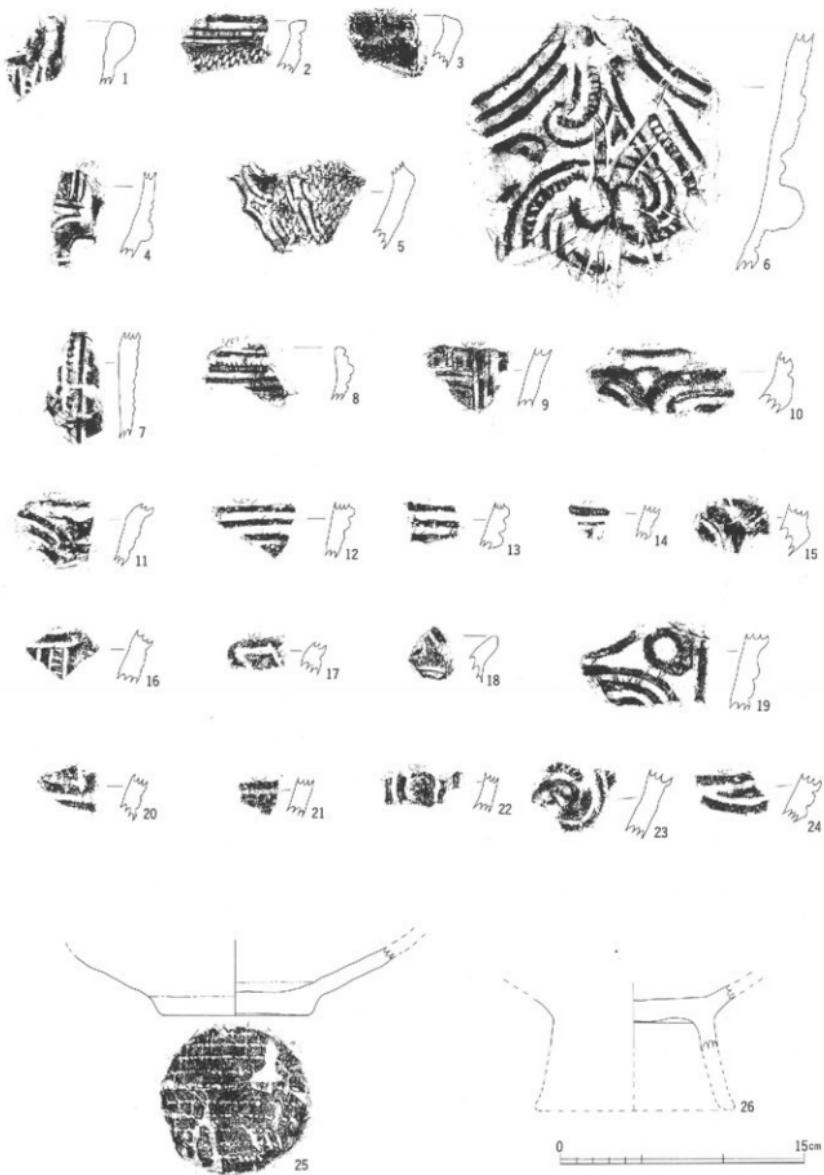


図版16 遺物実測図(A遺跡)(1/3)

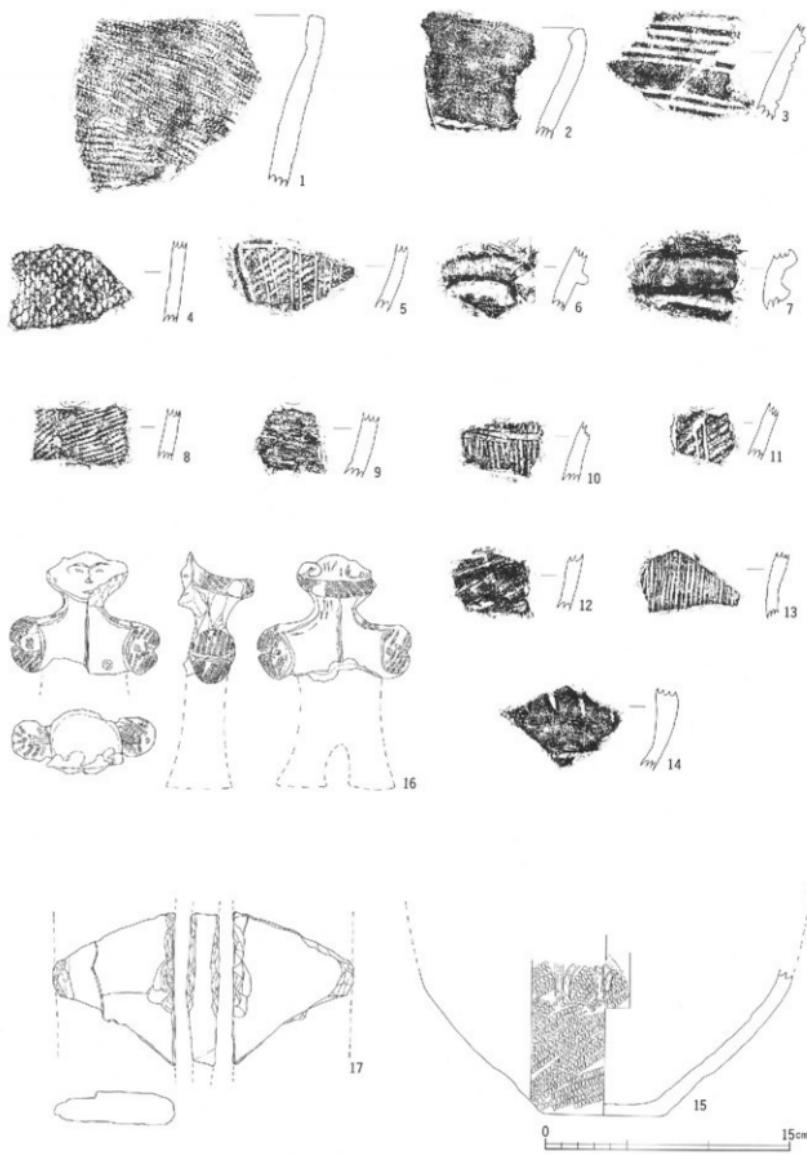
石器

2:1号住居跡、(図版39参照)

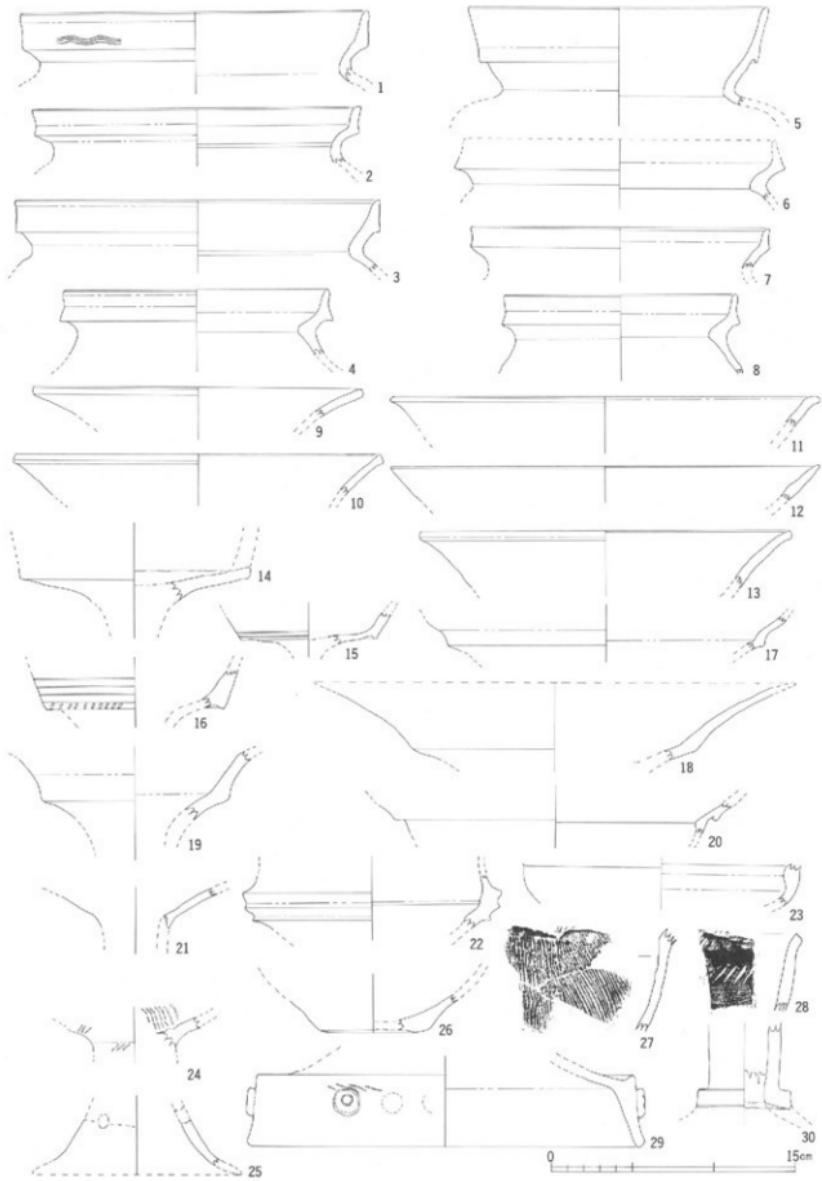
0 15cm



図版17 遺物実測図(D遺跡)(1/3)
縄文土器(図版40参照)



図版18 遺物実測図(D遺跡) (1/3)
縦文土器：1～15、土偶：16、石器：17（図版41参照）



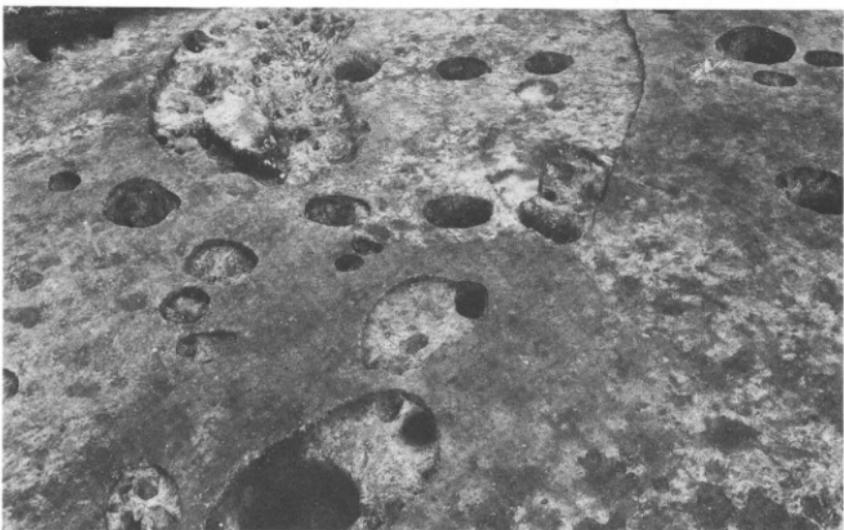
図版19 遺物実測図(D遺跡) (1/3)
古墳時代遺物 (図版42参照)



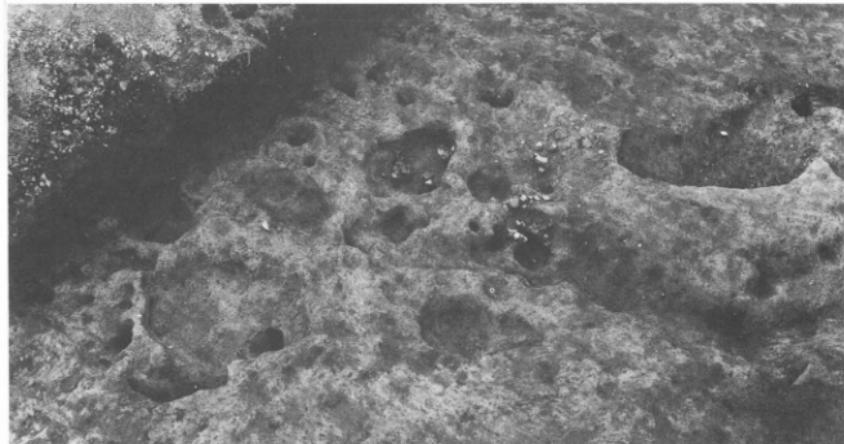
図版20 A遺跡発掘区全景（北より）



図版21 A遺跡発掘区西側（南より）



図版22 1. 1号住居跡, 2. 52号・44号穴, 3. 3号住居跡, 4. 作業風景

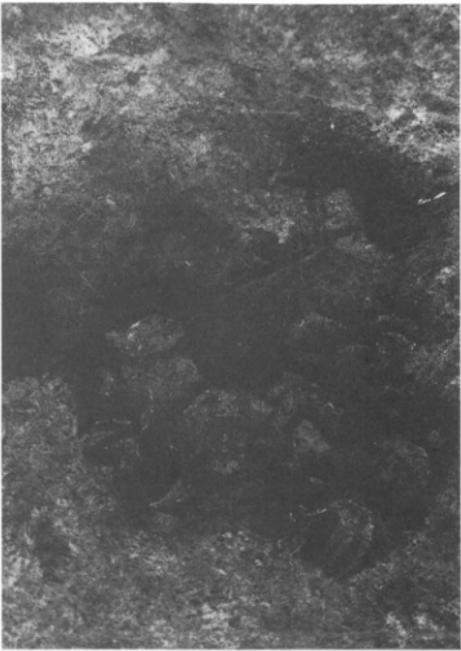
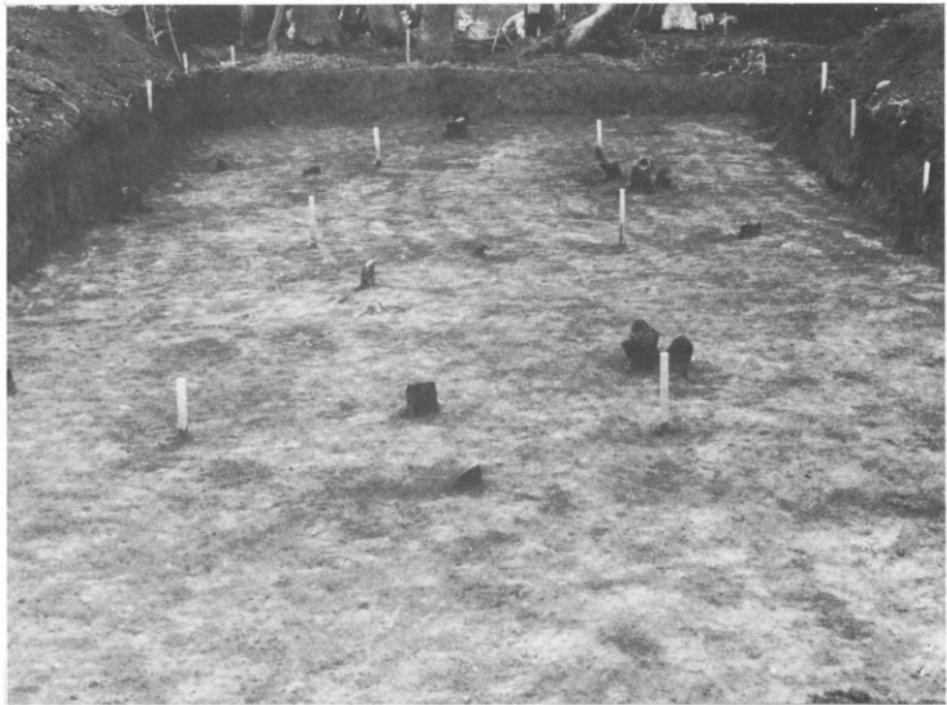


図版23 1. 31号・32号穴（北より）
3. 発掘区南東端作業風景

2. 奈良・平安時代遺物出土状況



図版24 1. 発掘区北西端（北より） 2. 南東端（南より）
3. 作業風景



図版25 1. D遺跡東側（東より） 2. 土偶出土状況
3. 浅鉢出土状況 4. P 8土器だまり



図版26 遺物写真(A遺跡)
(1~4・6・7:1/3, 5:1/6, 4-7・4-8:1/1) (図版2・4 参照)



1



2



3



4



5



12



9



8



7



6



13



11



14



10



16



15



4-3



4-4



20



17



18

図版27 遺物写真(A遺跡)

奈良・平安時代遺物(図版3参照)(1/3)

古墳時代遺物-3,-4(図版4参照)



3-21



3-22



6



2

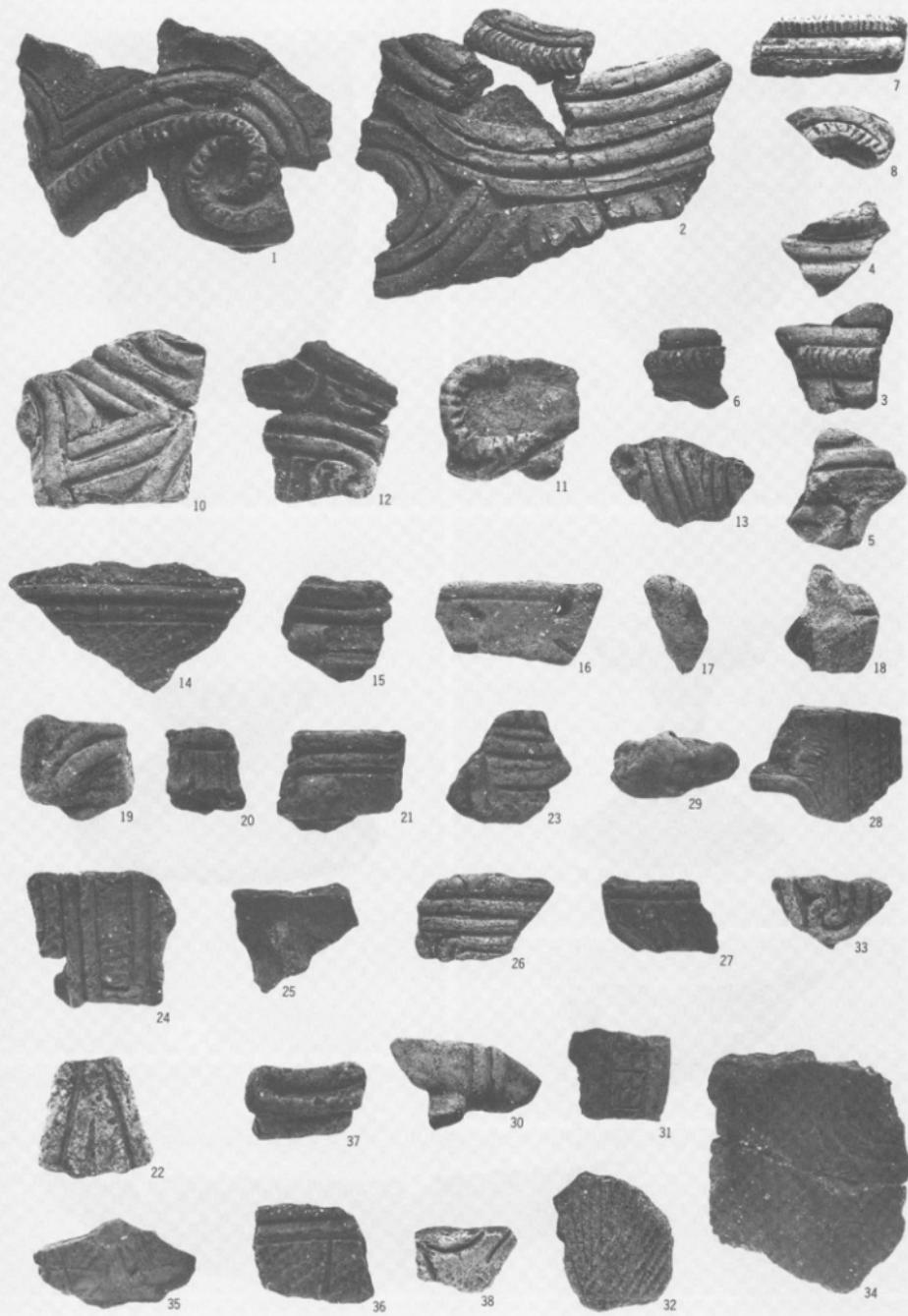


5

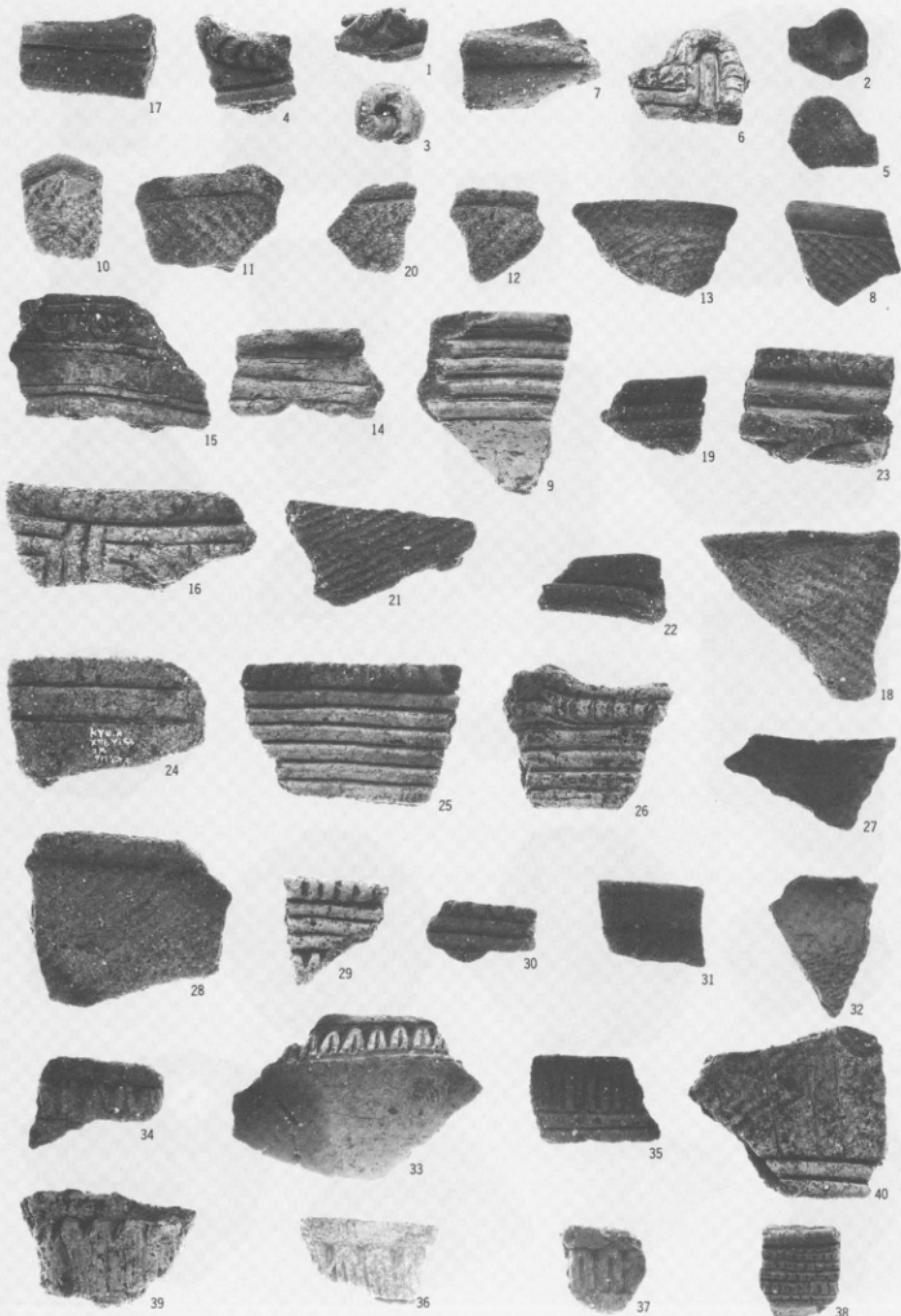


1

図版28 遺物写真 -21・22 奈良平安時代遺物（A遺跡）（図版3参照）（1/3）
1. 繩文土器，2・5・6 古墳時代遺物（図版4参照）



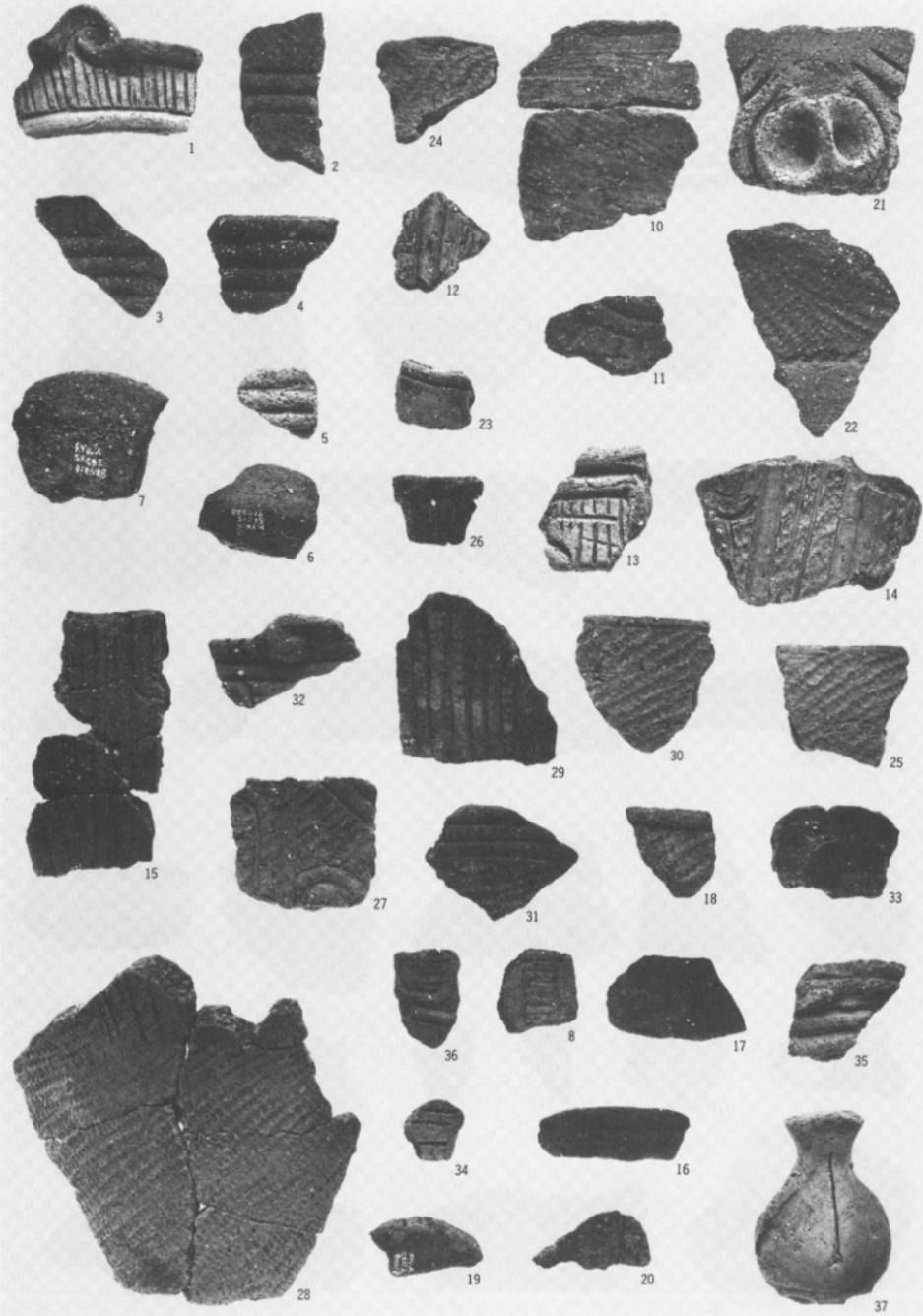
図版29 遺物写真(A遺跡)(1/2) 縄文土器(図版5参照)



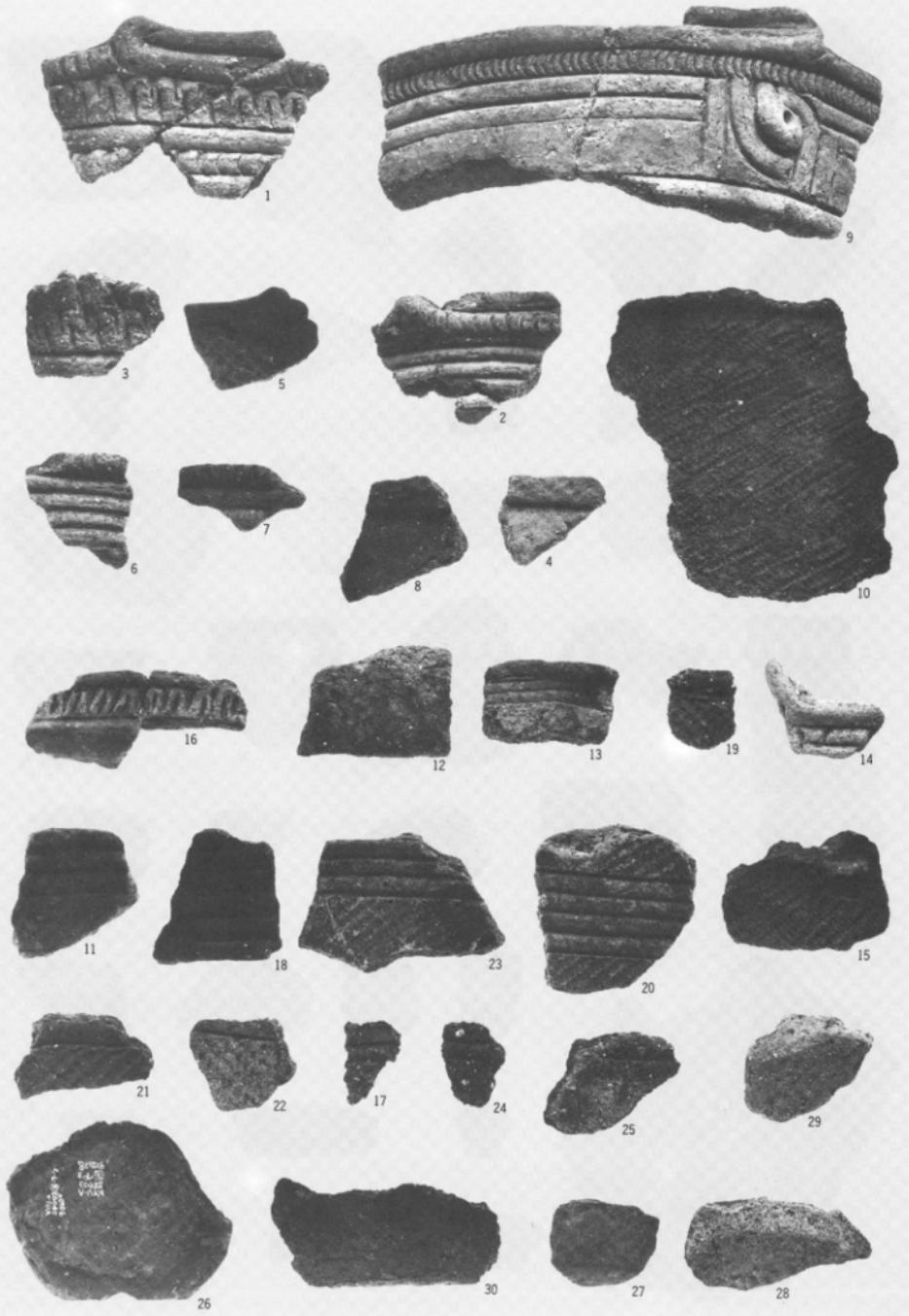
図版30 遺物写真(A 遺跡) (1/2) 繩文土器 (図版 6 参照)



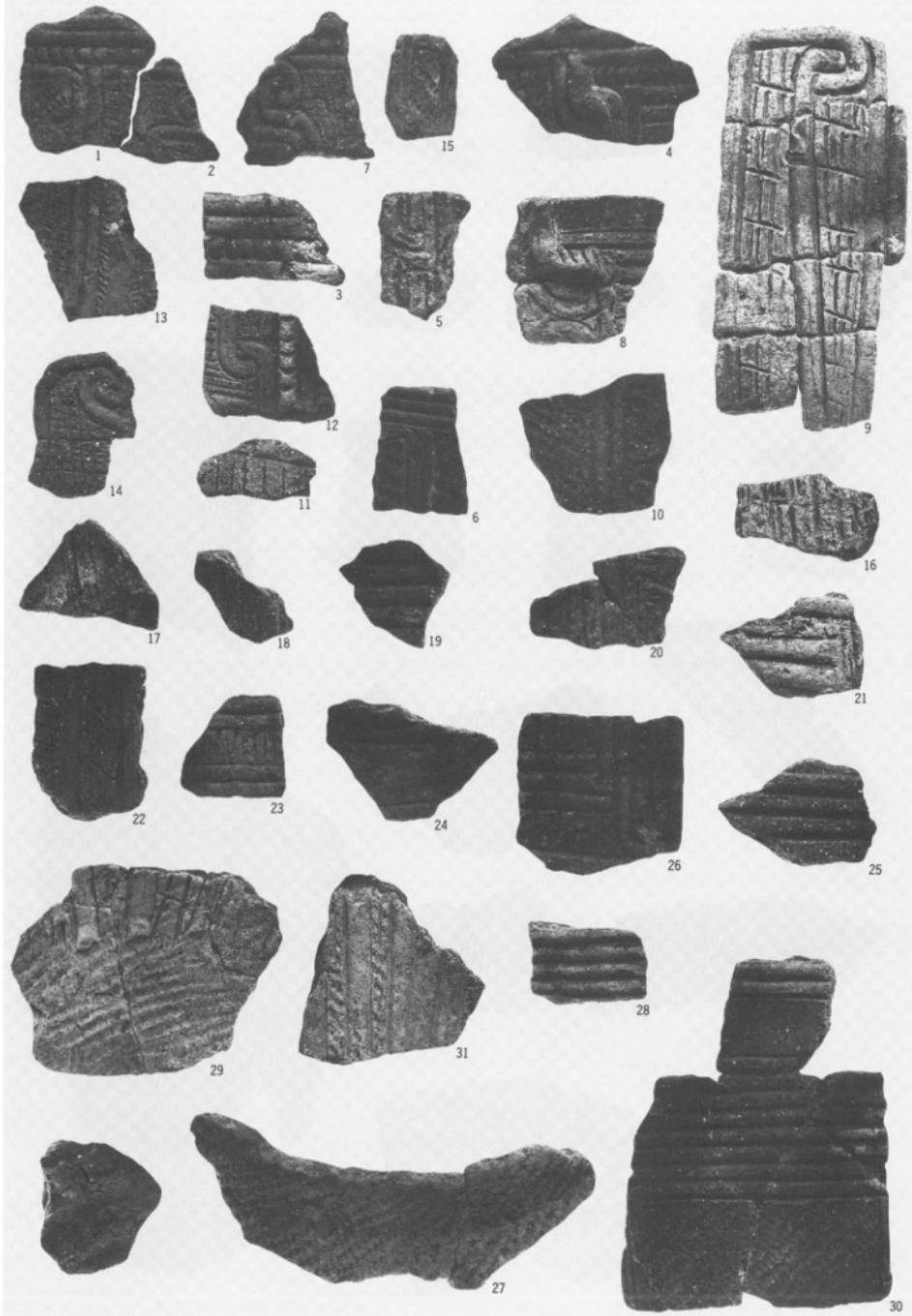
図版31 遺物写真(A遺跡)(1/2) 縄文土器(図版7参照)



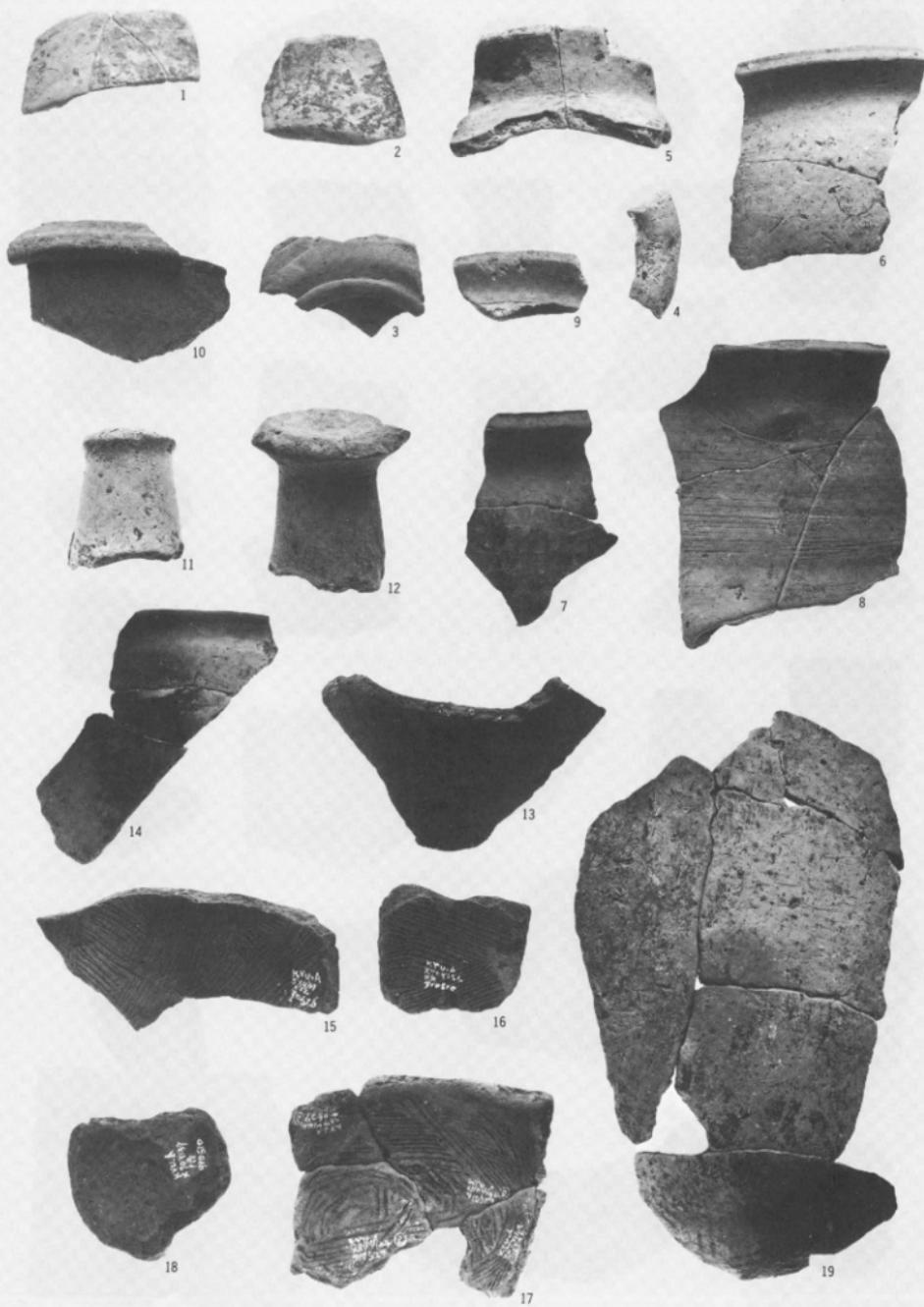
図版32 遺物写真(A遺跡)(1/2) 縄文土器(図版8参照)



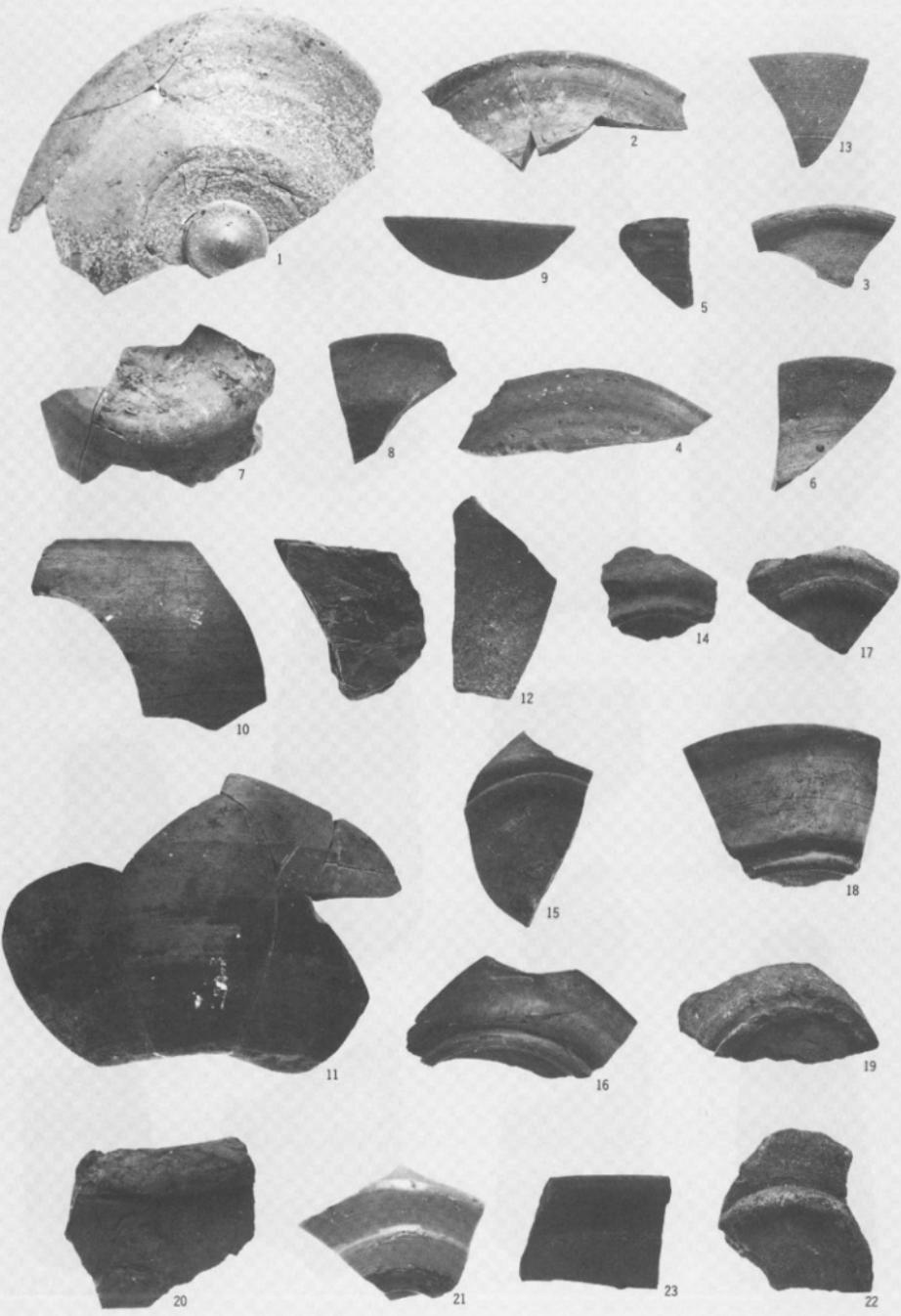
図版33 遺物写真(A遺跡)(1/2) 織文土器(図版9参照)



図版34 遺物写真(A遺跡)(1/2) 純文土器(図版10参照)



図版35 遺物写真(A 遺跡) (1/2) 奈良・平安時代 (図版11参照)



図版36 遺物写真(A 遺跡) (1/2) 奈良・平安時代及び中近世遺物 (図版12参照)